女子新國語讀本

新制版

卷十

375.9
0m15
資料室

42479

教科書文庫

4
810
42-1941
200030
2121

資料室
375.9
Om15.

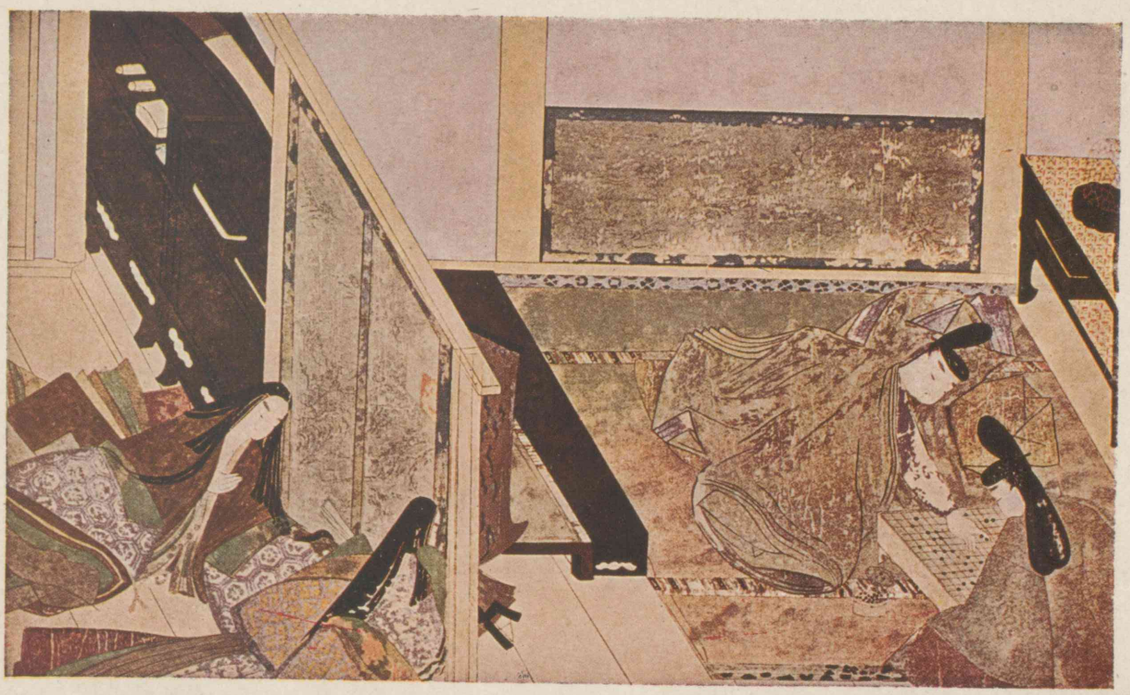
京都帝國大學
教授文學博士 澤瀉久孝
奈良女子高等
師範學校教授 木枝增一 共編

女子新國語讀本

新制版

文部省檢定濟
昭和十六年七月三十日
高等女學校國語科用

山口大学 図書 35394



源氏物語繪卷　（春日隆能筆）　（第四課參照）

編纂の趣意

本書は、昭和十二年三月二十七日改正發布せられたる高等女學校國語科教授要目に則り、左の諸點に留意して編纂しました。

一、國民精神の體得―これに就いては、國體の精華、國民の美風、偉人の言行を敍し、特に日本女子としての特性を養ふに足る材料を選定しました。

二、文學精神の涵養―これに就いては國文學の本質に基づき、時に於ては古今、形に於ては樣式の種々相に亙り、心情を優雅ならしむべき材料を選定しました。

三、國語精神の把握―これに就いては、各教材が總べて醇正なる國語に採つてあるのは勿論、更に國語の正しい相を認識せしむると同時に、國語愛護の念を培ふに足る特別なる材料を選定しました。

右三點の外、世界の情勢を知らしめて圓滿なる國民的常識を養成するに足るもの、女子の本務たる家庭生活の趣味を向上せしめるに足るものをも加へました。

昭和十二年七月

木枝增一
澤瀉久孝

目次　卷十

一　皇道　清原貞雄　一
二　國語の力　垣内松三　三
三　菅公の配流　大鏡　三
四　須磨の秋風　紫式部　六
五　源氏物語と日本的なるもの　久松潛一　三
六　春は曙　清少納言　四〇
七　都歸　紀貫之　四六
八　都鳥　伊勢物語　吾
九　月の都　竹取物語　六一
一〇　國語の變遷　吉澤義則　六七
一一　萬葉集の精神　編者　八一

一二　萬葉集抄　九〇
一三　大和國原　武田祐吉　九六
一四　上代文學抄　一〇七
一五　言問　北原白秋　一一六
一六　母の寫眞　窪田空穗　一二八
一七　婦人の內助　穗積重遠　一三七
一八　萬物流轉　平泉澄　一四六
一九　日本文化　西田直二郎　一五五
二〇　日本精神と世界精神　藤村作　一六一

附錄
日本文學年表

……終……

廣島大學圖書之印

女子新國語讀本 新制版 卷十

清原貞雄
大分縣の人、倫理學者、文學博士、廣島文理科大學教授、明治十八年(三五三)年。

王道
覇道
儒教

一 皇道

清原貞雄

支那では國を治むる道を王道と覇道とに分けてゐて、昔から王・覇の論は儒教でも最もやかましいものである。王・覇の別を簡明に言現せば、德を以て治めるのが王道であり、力を以て治めるのが覇道である。終始德を以て民に臨ませられた我が御歴代の政治は、正しく王道であると見なければならぬ。併し、支那の王道の説明をそのまゝ當嵌める事は困難であつて、王道に於ては見る事の出來ない特殊の要素を含んでゐる。

故に王道と區別して、特に皇道の名目を立てるのである。

皇道は肇國以來、我が御歴代の天皇の國を治めるのに據り給ひし道、また現に據り給へる道である。然らば、皇道の內容はいかなるものであるか。

第一に、「しらす」の政治を以て治國の理想としてをられる事である。「しらす」は「知る」に敬語の助動詞「す」をつけたものであつて、統治なさる意味である。この「しらす」の語を、同じく君臨する意味を有する「うしはく」なる語と區別して用ひてゐる事は、我が皇道政治の上に極めて深い意義をもつてゐるのである。この區別を最も明瞭に現してゐるのは、武甕槌神が天神の命を受けて、出雲國にある大國主命に對して、その領國を天神の御子に奉るべき事を交渉された時に傳へられた天神の

汝がうしはける
古事記、上卷。

私有物

御言葉である。「汝がうしはける葦原中國は、吾が御子のしらさん國なり云々」とある。「しらす」と「うしはく」とが區別して用ひてあるのはこれが初であるが、天照大神の神敕にも「爾皇孫就いて治らせ」とある。その後天皇の御統治を言現すには必ず「しらす」の語を用ひ、決して「うしはく」とは言はない。また、天皇を「すめらみこと」と申す。「すめ」は統べる事である。「みこと」は御事であつて、「方」と同じく人といふ語の敬稱である。「すめらみこと」とは統べるお方といふ意味である。即ち、天皇は國家を統べしらし給ふのである。「うしはく」の「うし」は「主」と同語であつて、所有者を意味し、「はく」は「刀を佩く」の「はく」で、身に附けてゐる事である。即ち、「うしはく」は自分の私有物とするのである。「しらす」には公共的の意味があり、「うしはく」には私的の

中正
傳位

意味がある。昔から天皇が常に民の利益を先とし給ひ、政治は國家國民の爲に行ひ給ひ、御自身の利益の爲に行はせられなかつたのは、かく「すべしらす」事を政治の原則とせられたからであつて、我が國體上極めて重要な事實である。

第二は、文武・剛柔いづれの極端にも陷らず、よくその調和を保つて、中正の政治を行ふのを理想とせられた事である。我が國傳位の信標、國家最高の寶物として、天照大神が皇孫にお授けになつた三種の神器こそ、實にその理想を表現したものである。支那では鼎を以て傳位の寶器としてをる。蓋し、農を盛にして食物を豐富にし、これによつて人民の生活を安らかにする事が王者の天職であるといふ思想である。これに對して我が國の神器は、鏡・劍・璽の三種である。この三種が國

仲哀天皇
第十四代の天皇、日本武尊の第二子、熊襲が叛いたので御親征遊ばされ、皇后と共に筑前（福岡縣）まで幸し給うたが、平定に先だつて紀元八六〇年御崩御になつた、御年五十二。

北畠親房
學者・政治家、吉野朝の忠臣、顯家等の父、正平九年（一三〇四）薨、年六十三。

神皇正統記
神代より後村上天皇の御代までの事蹟を記し、吉野朝の正統なる由を述べたもの、延元四年（一九九）の著作。

家の寶器として選ばれた精神に就いては、古來種々の解釋が行はれてゐるが、その起源をなすものは、蓋し日本書紀仲哀天皇の條に見える記事である。即ち天皇が筑紫に行幸せられる時に、筑紫の五十迹手なる者が、璽・鏡・劍の三器を捧げて天皇を奉迎して、次の如く申し上げた。

八尺瓊の勾れるが如くに、曲妙に天の下しろしめせ。白銅鏡の如くに、分明に山川海原を看行せ。乃ち是の十握の劍を提げて天下を平けたまへ。

鎌倉時代以後、神道を論ずる者は、多くはこの五十迹手の言によつて、我が三種の神器の意義を說いてゐるのである。

吉野朝時代に於て、北畠親房はその著神皇正統記に、三種神器に就いて次の如く述べてゐる。

鏡は一物をたくはへず、私の心なくして萬象を照らすに、是非善惡の姿あらはれずといふ事なし。その姿に從ひて感應するを德とす。これ正直の本源なり。璽は柔和善順を德とす。慈悲の本源なり。劍は剛利決斷を德とす。智慧の本源なり。この三德をあはせ受けずしては、天下の治らん事まことにかたかるべし。

即ち、鏡に正直の德を配し、玉に慈悲の德を配し、劍に智慧決斷の德を配し、これを以て我が國の政治の理想とするといふのである。

江戸時代に入つてからは、多くの學者は之を智・仁・勇の三德に配當し、支那の中庸は我が三種神器の註解であると說いてゐる。勿論、これ等は後世になつてからの說であるが、三種の

中庸　四書の一、孔子の孫子思の著、一卷、中庸不偏の德を說いた書。

神器が傳位の信標であるといふばかりでなく、鏡・璽・劍の三種が特に選ばれてゐるところに、必ず確乎たる意義を含んでゐるのであつて、そのいかなる意義であるかに就いては、人によつていろ〳〵の說があるであらうが、大體に於て鏡が公明正大を表し、璽が仁惠を表し、劍が武德を表す事は間違ないと思ふ。北畠親房が神皇正統記の中に、天壤無窮の神敕、及び「この鏡を視ること朕を視るが如くせよ。」といふ神敕を記した後に、また「この鏡の如くに分明なるをもちて天下に照臨し給へ。八坂瓊のひろがれるが如く曲妙を以て天下を治食せ。神劍を提げて歸順はざる者を平げ給へ。」と敕りましましけるとぞ。

と言つてゐるのは、仲哀天皇紀にある五十迹手の語を神敕で

剛利
譎詐
無抵抗主義

あるとした鎌倉時代の神道家の説をそのまゝ取つてゐるのであつて、古傳とは違つてゐるが、三種神器の表す統治の理想は、まさしくそこにあつたものであらう。即ち、鏡は萬象をあるがまゝに映すものであつて、少しの僞をも赦さない。これは正直・公明・正大の德を表す。璽は圓滿であり、且潤澤のあるものであつて、仁慈の德を表す。劍は剛利決斷の武を表す。これ等の諸德は、個人の守るべき道德としてもそのまゝ價値をもつてゐるのであるが、これを政治上の理想に當箝める時は、公明正大で少しの陰影もなく、譎詐もない事と、仁慈を旨とする「しらす」の政治を根本とする理想を鏡と璽とによつて表現してゐる事と見る事が出來るであらう。

かく仁慈を旨とするが、いはゆる無抵抗主義ではない。我

不逞
天誅
空理
休戚

が國の理想は强國主義である。鏡と璽とによつて表現するところの「しらす」の政治を受容れずして、どこまでも反抗せんとする不逞の徒に對しては、斷乎として破邪の劍を振るひ、天誅を加ふるのである。或は外部から來つて我が國を侵さんとする者があらば、これを打攘ふのである。この剛に偏せず柔に偏せざる中庸の政治こそ、實に我が皇道の特色である。

第三は、空理に囚れず、時の宜しきに順應して最善の政治を行ひ、必ず統治の美績を擧げる事を理想とする事であり、第四は、常に正しきを養ふ心を以て心とし給ふ事、第五は天皇は國家を以て家とし、國民と休戚を共にし給ふ事である。この三つは、いづれも神武天皇が大和を平定して橿原に都をお奠めになつた時に降された詔敕に現れてゐる。

我東征
日本書紀、卷第三
（神武天皇）。

みあらか

我東征しより茲に六年になりぬ。天つ神の威を被りて凶徒殺されぬ。邊の土未だ靜まらず、餘妖なほ荒れたりと雖も、中國また風塵なし。まことに宜しく皇都を廣め披き、みあらかをはかり作るべし。しかるに、今、運この屯蒙に屬ひ、民の心素朴なり。巣に棲み、穴に住む習俗、これ常となれり。それ大人の制を立つる、義必ず時に從ふ。苟も民に利あらば、いかにぞ聖の造に妨はん。またまさに山林を披き拂ひ、宮室を經營りて、敬みて寶位に臨み、もちて元々を鎮め、上は則ち天つ神の國を授け給ひし、德に答へ、下は則ち皇孫の正しきを養ひ給ひし心を弘むべし。さて後に六合を兼ねて都を開き、八紘を掩ひて家とせんこと、またよからずや。

「義必ず時に從ふ。苟も民に利あらば、いかにぞ聖の造に妨はん」とあるのは、たゞ形式を整へ、徒に高遠な理想を立てて、それが實際に顯現するや否やを顧みないやうな無意義な事を斥けて、ただその時宜に最も適した政治を行つて、專ら國民の利益を主とし給ふ御精神を示したものである。「下は皇孫の正しきを養ひ給ひし心を弘むべし」とあるのは、上、天つ神に答へ奉るに對して、下は國民の爲に、常に正道を踏んで正しき政治を行ふ事を目標として、どこまでも努め給ふ御心である。「八紘を掩ひて家とせん」とあるのは、政治を以てどこまでも公事として、私事・私家の利益の爲としない事である。我が國に於て、天皇が國家全體を表現してをられるのはこの爲である。フランスのルイ十四世が「朕は國家なり」と言つたのは、極端な專制主義を表明した言葉であるが、日本に於て天皇卽國家と

ルイ十四世
大王と稱する賢王で、內治・外交・軍事の改良に力を加へ、フランス文化の隆盛を致した。（西暦一六三八—一七一五）

專制主義

仁德天皇
第十六代、應神天皇の皇子、攝津國（大阪府）難波高津に都し、仁政を施し給うた、紀元一〇五年崩御、御年百十歳。

百姓富める
日本書紀、卷十一（仁德天皇）。

日出づる國
清原貞雄著、日本の長所を理解せしめ、之によつて愛國心を培ひ、國民生活を緊張せしめると共に國民的自信力を養ひ、以て國民的自覺を促がさしめんとするもの、昭和四年（一九二九）十月刊行。

いふのは、日本といふ國が、天皇御一身によつて表現されてをり、天皇を外にして國家なく、天皇の御榮は國家の榮である事を意味するのである。仁德天皇が「百姓富めるは則ち朕が富めるなり。」と宣はせられたのも、同一の御精神である。我が國に於ては、國家の外に天皇があらせられる事は考へられない。我が皇室に姓名のないのもこの爲である。

我が皇道は以上を以て盡きてゐるのではないが、これ等はいづれも我が皇道の最も貴い所以の根本であつて、この皇道によつて三千年來惠まれ來つた國民の、常に心に銘記してゐなければならぬところである。

（日出づる國）

垣内松三
岐阜縣の人、國文學者、東京高等師範學校教授、明治十一年（一八七八）生。

有機的統一
言語共同性
錯綜
機能
氣魄
要請する

二　國語の力

垣内松三

國語の力は人間を形成する力であり、民族を形成する力であり、又國民を形成する力である。人間と言語、民族と言語、民族・國民と國語、これ等の有機的統一としての言語共同性は、悠久なる歴史と、複雜なる文化の錯綜の裡に、鍛錬せられ、研磨せられて、その性格と機能とを賦與せられた。されば、國語の氣魄と活力とは、人間を育成し、民族を鼓舞し、國民を向上せしめる根源である。現時、國語の力に就いて、我々の反省を深くし且鋭くすることが要請せられるに至つたのは、單に目前の事態に因るものではなく、一層眞實なる人間生活・民族生活・國民生活を要求する必然性に基づくのである。

フィヒテ　ヨハン・ゴツトリイプ、ドイツの哲學者、この一句はその祖國にナポレオン軍が侵入したときにその重圍中にあつて、「ドイツ國民に告ぐ」と題して演說した講演中にある。（西暦一七六二―一八一四）

ペスタロッチ　ヨハン・ハインリヒ、スキスの大教育家、本文は、「ゲルトルウドは如何に子供を教へるか」に出てゐる。（西暦一七四六―一八二七）

放埒　傳播

「言語が人間に作られるよりも、遙に多く、人間が言語に作られる。」とフィヒテがいつた如く、實に言語は、人間の存在に於ける缺く可からざる成素である。吾々の生は、吾々を生まれながらにとり卷く言語によつて圍繞せられ、それに依りて育成せられるのである。故にペスタロッチは、「今日、言語の墮落が如何に深く行きわたつて居るか。それは、現代の社會のあらゆる方面に如何に深き根を張つて居るか。凡そ、人間の腐敗と放埒とのあらゆる根源は、實に言語に於てその中心を見出すのである。而して、世人は此の言語に於て、彼等共通の興味の爲に集合し、結合し、從つて、傳播するに至るのである。これに依つて、吾々は言語の腐敗は人間の腐敗と共に益甚だしくなるといふ恐るべき事實を說明することができる。」とさへ戒

言語は君子の樞機なり　易經繫辭傳に出てゐる。

めたのである。されば、古來「言語は君子の樞機なり。」とし、その愼を說かれたことも深く考へなければならぬ。

國語の力が、民族を團結する諸成素の中に於ても最も有力なる要素であることは、これまでといへども、幾多の人々に依つて述べられたことであつた。しかし、その最も顯著にして痛切なる立言を見るに至つたのは、最近に於ける民族的意識の覺醒に依るものといはなければならない。元來民族といふ概念の中には、人種といふことも、社會といふことも、宗教といふことも、その他の諸成素も採入れられるのであるが、これ等の標語が示すやうに、民族はある場合には、生物學的な血族共同性を示し、社會的な共同生活を意味し、又他の場合には精神的な共同意識をも指してゐるのである。然るに言語はと

側面
奄有する
一義的に
反撥する
偏向

れらの要素として、しかも同時に、これらのすべての側面を奄有するものとして、これ等の共同性を統括し、民族とは一義的に言語民族であると謂はれて居る。此の如き國語の重要性に就いては、何人にも自明のやうでありながら、これまで十分自覺されてゐたといふことはできない。

吾々が民族とか社會とか考へる場合に、これまで、その一成素としての血族的なものを固執し、その他のものを反撥するやうな偏向をさへ持つて居た。然るに現代の民族觀は、血統を異にする諸民族の綜合的な包括的な立場に於ける民族團結にまで擴大されなければならぬ。又、社會的にも先づ一定の土地が考へられるのであるが、交通の發達その他によつて、地域が狹められ、領域を越えて移住する民族が、異域に集團を

意欲
媒介

成す場合には、國土の考へ方は適用されなくなつて居る。そして、唯共同の感情、共同の意欲、共同の利害によつて團結されて始めて、民族又は國家といふ共同體を構成することができるのであるとしたら、その共通のものはいかにして得られるか。それは全く國語を媒介とする、一民族の獨得な共同性に依る共同體として、共同の認識と、共同の感情を有するためであらねばならぬ。

人類の共同社會の最高の發展の形式は國家である。元來國民といふときには、一人々々の國民であつて、しかも同時に全體の一員としての國民といふことが意味されるのであるが、現代に於ては特に全體なる國家の一員としての生活が深く意識せられ實踐せられてゐる。吾々は先づ第一に國民で

精神物理的な

國語問題

何となれば

あり、次に國民中の一員として他との交渉を持つのであつて、その逆ではない。國民こそ人間生命の總體であり、共同的全體である。國家といふ形式を備へない單なる民族が、いかに無力であるかは何人もよく知るところであるが、國家は常に一つの精神物理的な綜體である。それこそ吾々の根源的な生活關係としての國家である。勿論獨立なる人格としての國家は、その生成發展の途上に於て種々の問題に遭遇するのであるが、就中國語問題はその最も主要なものの一つである。何となれば、國家といふときには常に何らかの統一が考へられるのであるが、國語の統一なくして國民としての精神的融合を見ることは不可能であるからである。故に國語問題は、何處如何なる時代に於ても、躍進せんとする國民の必ず解決

隆替

せざるを得ない切實なる問題であつた。社會は常に我と汝との交渉の關係であり、言語的共同性と社會生活とは同一である。吾々の根源的なる生活關係である國家は、吾々の根源的なる精神活動である國語の力に基づくものでなければならないのである。故に、國語問題の根柢には、常に國民生活及び國民精神の問題が潛んで居る。國語は、國民全體の生活及び精神と廣い深い交渉をもつものであるから、その統一・不統一は、直接に國運の隆替と密接なる關係のあることを考慮して、その愛護を心がけなければならない。

國語を精練することは國民文化を完成することである。國民文化の特性を發揮することに依つてのみ、世界に何ものかを貢獻することができるとすれば、吾々の日常生活に於け

る國語を愛護することは、重大なる意義を有するものであらねばならぬ。それは、一に國民が國語をいかに觀るかといふ根本的な態度に依つて自ら規定されるものである。吾々は、國語の力は、人間を形成する力であり、民族を形成する力であり、又國民を形成する力であることを深く内省し、且明かに覺知しなければならぬ。

（國語教育科學講座第一卷）

民族精神を形成するものとして國語の役割を知悉し、これを統制することが學校の最高の權利であり、同時に最大の義務であるといはれる。血族的なる共同性の具體的精神的なる示現者は、先づもつて國語であり、國文學である。こゝに國語教育の新使命が説かれ、國語教育の再建が叫ばれようとしてゐる。

（國語教育科學講座第一卷）

國語教育科學講座
垣内松三著、獨立講座、著者の國語教育に關する全體系を明かにせんとするもの、全十二卷の内九卷既刊、昭和九年（一九三四）四月―昭和十年十月刊行。

醍醐の帝
第六十代、醍醐天皇、延長八年（九三〇）崩御、御年四十六。

時平
藤原氏、延喜九年（九〇九）薨、年三十九。

菅原
名は道眞、延喜三年（九〇三）薨、年五十九。

その折
昌泰二年（八九九）、醍醐天皇は御年十五であらせられた。

三 菅公の配流

醍醐の帝の御時、時平のおとゞは左大臣の位にて、年いと若くおはします。菅原のおとゞは右大臣の位にておはします。その折、みかど御年いと若くおはします。左右大臣に世の政を行ふべき宣旨下さしめ給へりしに、その折、左大臣御年二十八九ばかりなり。右大臣の御年五十七八ばかりにやおはしましけん、ともに世の政をせしめ給ひしほどに、右大臣はざえも世にすぐれ、めでたくおはしまし、御心おきても殊の外に賢くおはします。左大臣は御歳も若く、ざえも殊の外に劣り給へるによりて、右大臣御おぼえ殊の外におはしましたるに、左大臣安からずおぼしたるほどに、さるべきにやおはしけん、右

昌泰四年　同年七月に延喜と改元せられた（一五六一）。

あ　ふ

おほやけ

あやにく

大臣の御爲によからぬこと出で來て、昌泰四年正月二十五日、太宰權帥になし奉りて流され給ふ。

このおとゞの子ども數多おはせしに、女君たちは婿取し、男君たちは皆ほど〳〵につけて位どもおはせしを、それも皆方方に流され給ひて悲しきに、幼くおはしける男君・女君たち慕ひ泣きておはしければ、「小さきはあへなん」と、おほやけも許さしめ給ひしかば、ともにゐて下り給ひしぞかし。帝の御掟きはめてあやにくにおはしませば、この御子どもを同じ方にだに遣はさざりけり。かたがたにいと悲しく思し召して、御前の梅の花を御覽じて、

東風吹かばにほひおこせよ梅の花あるじなしとて春なわすれそ

亭子の帝　宇多天皇、第五十九代、醍醐天皇の御父、道眞を登庸したまうた、御讓位の後、亭子院にお住まひになつた、承平元年（一五九一）崩御、御年六十五。

しがらみ

山崎　山城國（京都府）乙訓郡。

播磨國　今の兵庫縣の南西部。

明石のうまや　今の明石市。

また、亭子の帝にきこえさせ給ふ。

流れゆくわれはみくづになりはてぬ君しがらみとなりてとゞめよ

なきことによりかく罪せられ給ふを、からく思し歎きて、やがて山崎にて出家せしめ給ひてけり。その程極めて悲しき事多かり。日頃へて、都遠くなるまゝに、あはれに心細くおぼされて、

君がすむ宿の梢をゆく〳〵も隱るゝまでもかへりみしはや

また、播磨の國におはしましつきて、明石のうまやといふ處に御宿りせしめ給ひて、驛の長のいみじう思へる氣色を御覽じて、作らせ給へる詩いと哀し。

驛の長

筑紫

筑前國（福岡縣）、又太宰府をいふ。

驛長驚ク無カレ時ノ變改スルヲ、
一榮一落コレ春秋。

かくて筑紫におはしまし著きて、あはれに心細く思さるゝゆふべ、遠方に處々煙立つを御覽じて、

夕されば野にも山にも立つ烟なげきよりこそもえはじめけれ

又、雲の浮きてたゞよふを御覽じても、

山わかれ飛びゆく雲の歸り來るかげ見るときはなほ頼まれぬ

さりともと世を思しめされけるなるべし。月のあかき夜、

海ならずたゞよふ水の底までもきよきこゝろは月ぞ照らさん

大貳の居處

太宰府。

觀音寺

筑前國（福岡縣筑紫郡水城村に舊址がある、時の大貳は藤原興範。

都府樓ハ纔ニ

菅家後集に「不出門」と題して全詩を載せてゐる。

文集

白氏長慶集とも云ふ、白居易の詩文集、七十一卷、我が國では平安朝時代に白氏文集、或は單に文集といつて盛に愛讀せられた。

遺愛寺ノ鐘ハ

白氏文集十六、「香爐峰下、新ニ山居ヲトシ、草堂初メテ成ル、偶東壁ニ題ス五首」中の聯句の一。

まさざまに

これいとかしこくあそばしたりかし。げに月日こそは照らし給はめとこそはあめれ。

筑紫におはします所の御門も、かためておはします。大貳の居處は遙なれども樓の上の瓦などの、心にもあらず御覽じやられけるに、また、いと近く觀音寺といふ寺のありければ、鐘の聲をきこしめして作らせ給へる詩ぞかし。

都府樓ハ纔ニ瓦ノ色ヲ看、
觀音寺ハ只鐘ノ聲ヲ聽ク。

これは、「文集の白居易の、『遺愛寺ノ鐘ハ枕ヲ欹テテ聽キ、香爐峰ノ雪ハ簾ヲ撥ゲテ看ル。』といふ詩にもまさざまに作らしめ給へり。」とこそ、昔の博士どもは申しけれ。

また、かの筑紫にて九月十日の菊の花を御覽じけるついで

博士

ぬれぎぬ

に、いまだ京におはしましし時、九月の今宵、内裏にて菊の宴ありしに、この大臣の作らしめ給へりける詩を、帝かしこく感じ給ひて、御衣賜はり給へりしを、筑紫にもて下らしめ給へりければ、御覽ずるに、いとゞ其のをり思し召しいでて作らせ給ひける。

去年ノ今夜清涼ニ侍ス、
秋思ノ詩篇獨リ腸ヲ斷ツ。
恩賜ノ御衣今此ニ在リ、
捧ゲ持チテ毎日餘香ヲ拜ス。

この詩いとかしこく、人々感じ申されき。

また雨の降る日、うちながめ給ひて、

あめの下かわけるほどのなければや著てしぬれぎぬ

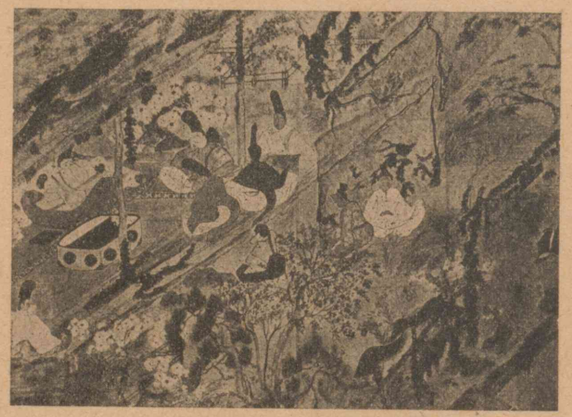
そこら
北野宮
官幣中社北野神社、京都市上京區にある。

あらひと神

安樂寺
今、太宰府天滿宮卽ち太宰府神社のあるところ。

大鏡
八卷、著者未詳、文德天皇から後一條天皇まで百七十六年間の出來事を記した假名文の列傳體歷史物語。

ひるよしもなき



菅公御居圖（北野緣起繪詞）

やがて、かしこにてうせ給へり。

夜の中に、この北野にそこらの松をおほさしめ給ひて渡り住み給ふこそは、只今の北野宮と申して、あらひと神におはしますめれ。おほやけも行幸せしめ給ふ。いとかしこくあがめ奉り給ふめり。

筑紫のおはしましし所は、安樂寺といひて、おほやけより別當・所司などなさせ給ひて、いとやんごとなし。（大鏡）

口繪參照

紫式部
藤原爲時の女、藤原宣孝に嫁す、宣孝の死後上東門院に仕ふ、長和五年（一〇一六）歿、年三十九。（歿年・年齢は一説）

須磨
今、神戸市の西端。

行平中納言
平城天皇の皇子阿保親王の第二子、弟業平と共に在原の姓を賜はる、歌人、寛平五年（一八九三）歿、年七十六。

關吹越ゆる
旅人は袂すゞしくなりにけり關吹きこゆる須磨の浦風。（續古今和歌集）

四　須磨の秋風

紫式部

須磨には、いとゞ心づくしの秋風に、海は少し遠けれど、行平の中納言の「關吹越ゆる」と言ひけむ浦波、夜々はげにいと近く聞えて、またなく哀れなるものはかゝる所の秋なりけり。御前にいと人ずくなにて、打休み渡れるに、ひとり目を覺して、枕を欹てて四方の嵐を聞き給ふに、波たゞ此處もとに立ちくる心地して、涙落つとも覺えぬに枕浮くばかりになりにけり。琴を少し搔鳴らし給へるが、我ながらいと凄う聞ゆれば、彈きさし給ひて、

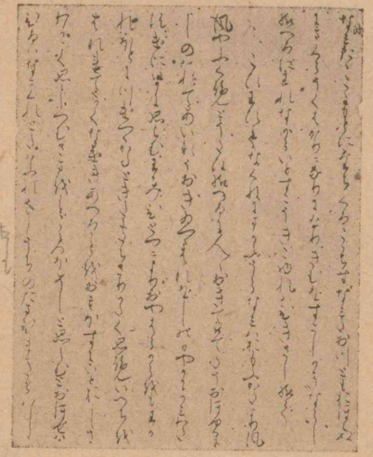
こひわびて泣く音にまがふ浦波は思ふ方より風や吹くらむ

あいなし

何くれと

書きすさぶ

と謠ひ給へるに、人々驚きて、めでたう覺ゆるにしのばれて、あいなう起き居つゝ、鼻を忍びやかにかみ渡す。げに如何に思ふらむ、我が身一つにより、親・兄弟片時立離れ難く、程に附けつつ思ふらむ家を別れて、斯く惑ひ合へると思すに、いみじくて、いと斯く思ひ沈む樣を、心細しと思ふらむと思せば、晝は何くれと戯れ言打宣ひ紛はし、つれ〴〵なる儘に、色色の紙を繼ぎつゝ手習をし給ひ、珍しき樣なる唐の綾などに、樣々の繪どもを書きすさび給へる屏風の面どもなど、いとめでたく見所あり。人々の語り聞えし海山の有樣を遙に思ひ



源氏物語（河内本）

たゝずまひ
千枝・常則　共に當時の繪師、傳未詳。
作繪
なよゝかなり
直衣
釋迦牟尼佛弟子　經文を誦する時、まづ始めに「釋迦牟尼佛弟子云々」と唱へるのである。

遣りしを、御目に近くては、げに及ばぬ磯のたゝずまひ、二なく書集め給へり。「此の頃の上手にすめる千枝・常則などを召して、作繪仕うまつらせばや。」と心もとながりあへり。

懐かしうめでたき御有様に、世の物思ひ忘れて、近う馴仕うまつるを嬉しきことにて、四五人ばかりぞつと侍ひける。

前栽の花いろ〳〵咲亂れ、面白き夕暮に、海見やらるゝ廊に出で給ひて、佇み給ふ御様のゆゝしう清らなるに、所柄はましてこの世のものとも見え給はず。白き綾のなよゝかなる、紫菀色など奉りて、こまやかなる御直衣、帶しどけなく打亂れ給へる御様にて、「釋迦牟尼佛弟子」と名告りて緩によみ給へる、また世に知らず聞ゆ。沖より舟どものうたひのゝしりて漕行くなども聞ゆ。ほのかに、たゞ小さき鳥の浮かべると見やら

黒木
良清　播磨守の子、源良清、源氏の從者。
民部大輔　名は惟光、源氏の從者。
前の右近丞　伊豫介の子、源氏の從者。

るゝも心細げなるに、雁のつらねて鳴く聲、楫の音に紛へるを打眺め給ひて、御涙のこぼるゝを掻ひ拂給へる御手つき、黒木の御數珠に映え給へるは、故郷戀しき人々の心、皆慰みにけり。

初雁はこひしき人のつらなれや旅のそら飛ぶ聲のかなしき

と宣へば、良清、

かきつらね昔の事ぞおもほゆる雁はその世の友ならねども

民部大輔、

心から常世を捨てて鳴く雁を雲のよそにもおもひけるかな

前の右近の丞、

常世出でて旅の空なる雁がねも列におくれぬ程ぞなぐさむ

「友惑はしては如何に侍らまし。」と言ふ。親の常陸になりて下りしにも誘はれて、參れるなりけり。下には思ひ碎くべかめれど、誇りかにもてなして、つれなき樣にしありく。

月のいと花やかにさし出でたるに、今宵は十五夜なりけりと思し出でて、殿上の御遊戀しく、月の顏のみまもられ給ふ。「二千里外古人心」と誦し給へる、例の涙も止められず。「夜更け侍りぬ。」と聞ゆれど、なほ入り給はず。

見る程ぞ暫し慰むめぐりあはむ月の都ははるかなれども

（「源氏物語」による）

誇りかに

源氏物語
五十四卷、紫式部の作、宮廷生活を中心としての平安朝の世相を描いた長篇小說。

久松潛一
愛知縣の人、國文學者、文學博士、東京帝國大學教授、明治二十七年（一八九四）生。

ウエリイ
英國人、文學者。

文學形態

五　源氏物語と日本的なるもの

久松潛一

源氏物語が日本文學の代表的作品の一であることはいふまでもないが、それが、ウエリイの英譯源氏物語の完成によつて、西歐の方でも大いに賞讃せられて居るといふことは普遍的な人間性を一面に有して居るためであらう。しかし、同時に源氏物語が日本文學として日本民族の特有なる精神を現して居ることは、否定することが出來ない。文學形態といふ點から見ても源氏物語を中心とする物語は、詩歌形態と小說形態との中間的形態である。それの著しい伊勢物語になると、歌が中心であるか、散文が中心であるか分からないやうな性質を有するのであつて、そのために歌物語といふ名を與へ

冗漫
惡文

られてゐるが、源氏物語にしても、作中に七百九十四首の短歌があつてそれが非常な效果を與へて居るのである。かういふ歌や作中の敍景や抒情的部分をのぞいて、事件の發展だけを讀んでは、源氏物語を讀んだといふことは出來ないほどであるのも、詩と小說との中間をゆく形態であるからである。從つて、他の物語に比して寫實的傾向が比較的多い源氏物語にしても、單純に寫實小說とは言つてしまへないのである。短歌や能樂や歌舞伎等とともに日本文學特有の文學形態といふべきであり、從つて、さういふ點を考へて讀まなければ、源氏物語の文章が冗漫で惡文であるといふ非難も起つてくるのであらう。

かういふ特有な文學形態を有して居る源氏物語の有する

性格描寫
心理描寫

表現內容は、平安時代の生活の寫實的表現であると共に、その中にかもされて居る情調の表現である。それは、美への憧憬でもあり生活理想でもある。從つて、源氏物語に描かれた多くの人物、わけて數多い女性には、かなり鋭い性格描寫や心理描寫も見られるが、なほそれらを通じて、作者の理想とする女性によつて統一されて居るのである。男性が光源氏によつて統一されて居るならば、女性は紫上によつて統一されて居るのである。紫上は源氏が幼い時から育て、源氏の理想とする女性に育てあげられた點に於て、それは作者の理想とする女性であり、また、かういふ女性を育てあげることに力を注いで居る所に、紫式部の女性觀を示すとともに、その女性觀による教育の可能なることを描いて居るとも言へる。

多感
めやすい

作者が源氏物語に於て現して居る生活理想・藝術理想・教育觀・女性觀の基調をなすものは調和を求める精神ではなかつたかと思ふ。式部に於ては、一切が調和する所に美があり、理想があつたのである。式部の最も理想とした女性は、感情と理性との圓滿に調和された人物である。夕顔や浮舟のやうな、感情だけで理性の乏しい女性は理想とする所ではない。葵上のやうな理性的で、感情的なうるほひの少い女性も理想的ではない。この調和した女性が紫上であるのである。もとより式部にすれば、完全な人はない。しかし、可能なる限度に於て理性と感情との調和した女性が理想であつたのである。式部は決して無反省な多感を肯定したのではない。さういふ調和的でない性格は必ず不幸に陷り、めやすくない行

勸善懲惡
素材

爲は惡い結果を生むのである。この調和を求める精神は、式部にとつては、人生理想であり藝術理想であつたとともに、道德でもあり、宗教でもあつたのである。この調和をよきといひ、菩提ともたとへて居り、然らざるをあしきといひ、煩惱ともたとへて居る。源氏物語を單に宗教的にのみ說く考、勸善懲惡的にのみ說く考は當らないが、しかし、源氏物語の中には藝術としての美の追求があるとともに、同時に道德を求め宗教を求める心があつたと私は觀たい。源氏物語も人生の表現である以上、素材としては道德と一致しない事柄もないではない。しかし、その素材を扱ふ態度に於て道德と一致する。むしろ廣い意味のより高き道德への精神を觀るのである。

作者紫式部ほど感情を常に反省する女性は、平安時代の女

性の中にも殆ど見出し難い。紫式部日記を見ても、式部は自分の言つた詞や行爲に對して常に反省して居るのを見る。さうして、なほ理性だけの人物でなかつたことも勿論である。式部は彼女自らの感情と理性とを常に調和することに努めてゐた。その點を彼女自らの人生理想として居たのである。これが源氏物語の人物描寫に於ても現れたのである。理性と感情との調和、形式と內容との調和、自然と人生との調和、寫實と理想との調和、敍事と抒情との調和、詩と小說との調和、藝術と道德と宗敎との調和、これが源氏物語の基調ではなからうか。

それは、平安時代の藝術理想であり生活理想であるとともに、日本民族精神の重要な特質の一つであらう。傳統的精神と外來文化とを調和統一せしめて新しい文化を創造してきたのが、日本的なるものの特質である。源氏物語はこの點に於て日本的なるものを基調として居るのである。この源氏物語の基調となるものを、本居宣長は「もののあはれ」といふ詞によつて現して居る。「もののあはれ」は形式と內容との調和、理性と感情との調和、自然と文化との調和を求めてやまぬ精神である點に於て、以上のやうな源氏物語の本質を「もののあはれ」と言つたのは至當である。宣長は「もののあはれ」を說くことによつて、源氏物語の藝術としての本質を、一應中世の宗敎や近世の道德から離したとともに、より高き意味に於て、文學を道德や宗敎と調和し統一せしめたと見ることが出來るであらう。

（現代隨筆全集第一卷）

現代隨筆全集
十二卷、ひろく現代の隨筆を集む、昭和十年（一九三五）三月―昭和十一年三月刊行。

清少納言
清原元輔の女、文學者、歌人、第六十六代一條天皇の皇后定子に仕へた、生歿年未詳。

たなびきたる
をかし
あはれなり

六春は曙

清少納言

一　四季

春は曙。やう〳〵白くなりゆく山ぎは少しあかりて、紫だちたる雲の細くたなびきたる。

夏は夜。月の頃はさらなり。闇もなほ、螢飛びちがひたる。雨などの降るさへをかし。

秋は夕暮。夕日はなやかにさして、山際いと近くなりたるに、烏のねどころへ行くとて、三つ四つ二つなど飛びゆくさへあはれなり。まいて雁などのつらねたるが、いと小さく見ゆる、いとをかし。日入りはてて、風の音、蟲のねなどいとあはれなり。

つとめて
つきづきし

冬はつとめて。雪の降りたるは言ふべきにもあらず。霜などのいと白く、また、さらでもいと寒き、火など急ぎおこして、炭もてわたるもいとつきづきし。晝になりて、ぬるくゆるびもてゆけば、炭櫃・火桶の火も、白き灰がちになりぬるはわろし。

（一段）

二　降るものは

降るものは。雪。霰。みぞれはにくけれど、雪の眞白にてまじりたる、をかし。雪は檜皮葺いとめでたし。少し消えがたになりたる程、またいと多うは降らぬが、瓦の目ごとに入りて、黑う眞白に見えたる、いとをかし。時雨、霰は板屋。霜も板屋、庭。

三　雲は

（二百四段）

祭　賀茂の葵祭、舊暦の四月の中の酉の日、今は五月十五日。
かへさ
紫野　今、京都市の北部、大徳寺邊の野。
おどろなる

雲は。白き。紫。黑き雲あはれなり。風吹くをりの雨雲。明けはなるゝ程の黑き雲の、やう〳〵白うなりゆくもいとをかし。月のいとあかき面に、薄き雲いとあはれなり。（二百八段）

四　あてなるもの

あてなるもの。水晶の數珠。藤の花。梅の花に雪の降りたる。いみじう美しき兒のいちごくひたる。（三十九段）

五　木の花は

木の花は。梅の、濃くも淡くも紅梅。櫻の花びら多きに、葉色濃きが、枝細くて咲きたる。藤の花、しなひ長く色よく咲きたる、いとめでたし。卯の花は品おとりて何となけれど、咲く頃のをかしう、郭公の蔭にかくるらんと思ふにいとをかし。祭のかへさに、紫野のわたり近きあやしの家ども、おどろなる

かづく
青朽葉
通ふ
あるやう

垣根などに、いと白う咲きたるこそをかしけれ。青色の上に白き單がさねかづきたる、青朽葉などに通ひて、いとをかし。

四月の晦、五月の朔などのころほひ、橘の濃く青きに、花のいと白く咲きたるに、雨の降りたるつとめてなどは、世になく心あるさまにをかし。花の中より、實の黃金の玉かと見えて、いみじくきはやかに見えたるなど、朝露にぬれたる櫻にもおとらず。郭公のよすがとさへ思へばにや、なほ更にいふべきにもあらず。

梨の花、よにすさまじくあやしき物にして、目に近く、はかなき文つけなどだにせず。愛敬おくれたる人の顏など見ては、たとひにいふも、げにその色よりして愛なく見ゆるを、もろこしに限なき物にて、文にも作るなるを、さりともあるやうあら

せめて

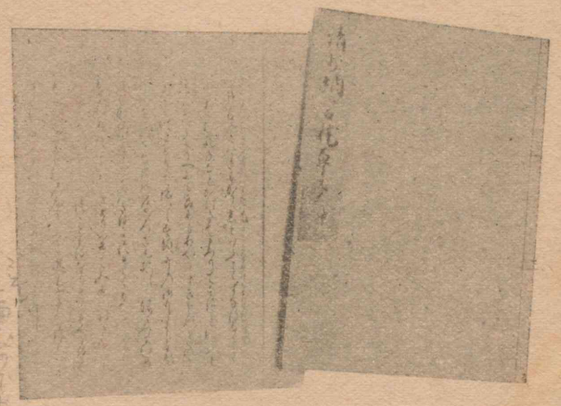
梨花一枝
白樂天の長恨歌に見える句。

おぼろげなり

うたてあり
ことごとし
鳥
鳳凰のこと。
爐―鑪
香爐峯
今、支那江西省九江縣の廬山にある山峯の一。

むとて、せめて見れば、花びらのはしに、をかしきにほひこそ心もとなくつきためれ。「梨花一枝春ノ雨ヲ帶ビタリ。」などいひたるは、おぼろげならじと思ふに、なほいみじうめでたき事はたぐひあらじと覺えたり。

桐の花、紫に咲きたるはなほをかしきを、葉のひろごり、さまうたてあれど、また異木どもと、ひとしういふべきにあらず。もろこしに、ことごとしき名附きたる鳥の、これにしも栖むらん、心ことなり。まして琴に作



枕草子（桂の宮本）

香爐峯の雪
二五頁參照。

枕草子
清少納言著、隨筆、三〇一段から成つてゐる、長保二年（一六〇）以後の作。

りてさま〳〵なる音の出で來るなど、をかしとはよの常にいふべくやはある。いみじうこそはめでたけれ。

木のさまぞにくげなれど、あふちの花いとをかし。かれ花にさまことに咲きて、必ず五月五日にあふもをかし。（三十四段）

六　香爐峯の雪

雪いとたかく降りたるを、例ならず御格子まゐらせて、すびつに火おこして物語などして集りさぶらふに、「少納言よ、香爐峯の雪はいかならん。」とおほせられければ、御格子あげさせて、御簾高く卷きあげたれば、笑はせ給ふ。人々も皆さる事は知り、歌などにさへうたへど、思ひこそ寄らざりつれ。「なほこの宮の人には、さるべきなめり。」といふ。

（二百五十六段）

（枕草子）

紀貫之　平安朝時代の歌人、古今集の撰者、土佐守・木工權頭等を歴任し、天慶九年（九〇六）卒、年六十五。

九日　承平五年（一九三五）一月、前年十二月二十一日土佐國（高知縣）出發。

大湊　土佐國（高知縣）長岡郡と香美郡との間の港。

奈半　土佐國（高知縣）安芸郡にある、今は奈半利村といつてゐる。

七都歸　紀貫之

九日。つとめて、大湊より奈半の泊を追はんとて漕出でけり。これかれ互に國の境のうちはとて、見送りに來る人あまたがなかに、藤原の言實・橘の季衡・長谷部の行政等なん、御館より出で給ひし日より、こゝかしこに追來る。此の人々ぞ志ある人なりける。此の人々の深き志は此の海には劣らざるべし。これより、今は漕ぎはなれて行く。これを見送らんとてぞ、此の人どもは追來ける。かくて漕行くまに〳〵、海のほとりに留れる人も遠くなりぬ。舟の人も見えずなりぬ。岸にも言ふことあるべし。舟にも思ふことあれどかひなし。かかれど、此の歌を獨言にしてやみぬ。

宇多の松原　土佐國（高知縣）香美郡赤岡。

うれどちぺらなり

音をのみぞ泣く

おもひやる心は海を渡れども文しなければ知らずやあるらん

かくて、宇多の松原を行過ぐ。其の松の數いくそばく、いく千年へたりと知らず。もとごとに浪うち寄せ、枝ごとに鶴ぞ飛びかふ。おもしろしと見るにたへずして、舟人のよめる歌。

見渡せば松のうれごとにすむ鶴は千代のどちとぞ思ふぺらなる

とや。此の歌は所を見るにえまさらず。

かくあるを見つゝ漕行くまに〳〵、山も海もみな暮れ、夜ふけて、西東も見えずして、天氣のこと、檝取の心にまかせつ。男もならはぬはいとも心細し。まして女は舟底に頭をつきあてて、音をのみぞ泣く。かく思へば、舟子・檝取は舟唄歌ひて、何

十六日
承平五年（五九五）一月。
深崎
土佐國（高知縣）安藝郡津呂村。

とも思へらず。

十六日。風・浪やまねば、なほ同じ所に泊れり。たゞ海に浪なくして、いつしか深崎といふ所渡らんとのみなん思ふ。風・浪ともに止むべくもあらず。或人の此の浪たつを見てよめる歌。

霜だにも置かぬかたぞといふなれど浪の中には雪ぞ降りける

さて舟に乘りし日より今日までに、二十日餘り五日になりにけり。

十七日。曇れる雲なくなりて、曉月夜いとおもしろければ、舟を出して漕ぎゆく。此の間に、雲の上も、海の底も、同じ如くになんありける。むべも昔の男は、

棹は云々
棹ハ穿ツ波底ノ月、紅ハ歷ス水中ノ天。（賈島）

十一日
二月十一日。
横ほる
八幡の宮
石清水八幡宮。

「棹はうがつ波の上の月を、舟はおそふ海の中の天を。」とはいひけむ。聞きさしに聞けるなり。また、或人のよめる。

水底のつきのうへより漕ぐ舟の棹にさはるは桂なるらし

これを聞きて、或人のまたよめる。

かげ見れば波の底なるひさかたの空漕ぎわたる我ぞわびしき

かくいふ間に、夜やうやく明けゆくに、檝取ら「黑き雲にはかに出で來ぬ。風吹きぬべし。御舟かへしてむ。」といひて舟かへる。此の間に雨降りぬ。いとわびし。

十一日。雨いさゝか降りて止みぬ。かくてさし上るに、東の方に山の横ほれるを見て、人に問へば、「八幡の宮。」といふ。こ

山崎の橋
山崎は山城國（京都府）乙訓郡、山崎の對岸橋本（綴喜郡）は橋の跡であるといふ。

相應寺
山崎の橋際にあつた。

小櫃の繪
昔、繪をかいた櫃があつた。

曲りの法螺
法螺貝の形をした勾餅といふ。

島坂
山城國（京都府）乙訓郡石塔寺の南。あるじす

れを聞きて、喜びて人々拜みたてまつる。山崎の橋見ゆ。嬉しき事かぎりなし。こゝに相應寺の邊に、しばし舟をとゞめて、とかく定むることあり。此の寺の岸の邊に柳多くあり。或人、此の柳の影の河の底に映れるを見てよめる歌。

さゞれ浪よするあやをば青柳のかげの絲して織るかとぞ見る

十六日。けふの夕つ方、京へのぼるついでに見れば、山崎の店なる小櫃の繪も、曲りの法螺の形も變らざりけり。賣る人の心をぞ知らぬとぞいふなる。かくて京へ行くに、島坂にて人あるじしたり。必ずしもあるまじきわざなり。立ちて行きし時よりは、歸る時ぞ人はとかくありける。これにもそれにも、かへりごとす。

桂河
今、京都市右京區桂町を流る、大堰川の下流、淀川に入る。

此の河
世の中は何か常なる飛鳥川きのふの淵ぞけふは瀬になる。（よみ人しらず―古今集）

飛鳥川
大和國（奈良縣）。

ひづ

夜になして京には入らんと思へば、急ぎしもせぬほどに、月出でぬ。桂河、月の明きにぞ渡る。人々のいはく、「此の河飛鳥川にもあらねば、淵瀬更に變らざりけり。」といひて、或人のよめる歌。

ひさかたの月におひたる桂河底なる影も變らざりけり

また、或人のいへる。

天雲のはるかなりつる桂河袖をひでても渡りぬるかな

また或人のよめりし。

桂河わがこゝろにも通はねどおなじ深さに流るべらなり

京の嬉しきあまりに、歌もあまりぞ多かる。夜更けて所々も見えず。京に入立ちて嬉し。

家に至りて門に入るに、月明かければ、いとよく有様見ゆ。聞きしよりもまして、いふかひなくぞこぼれやぶれたる。家を預けたりつる人の心も荒れたるなりけり。中垣こそあれ、ひとつ家のやうなれば、望みて預かれるなり。されば、たよりごとに物も絶えず得させたり。今宵かゝることと、聲高にものもいはせず。いとつらく見ゆれど、志はせんとす。

さて池めいて窪まり、水づける所あり。ほとりに松もありき。五年六年のうちに、千年や過ぎにけん、片枝はなくなりにけり。今生ひたるぞまじれる。大方皆荒れにたれば、哀とぞ人々いふ。思ひ出でぬことなく思ひ戀ひしきがうちに、此の

のゝしる

土佐日記

紀貫之著、土佐國守の任期滿ちて、承平四年（一五四）十二月二十一日、任地出發京都にかへるまで、五十五日間の紀行日記、女の立場になつて假名文で書かれてある。

家にて生まれし女子（をんなご）の、もろともに歸らねば、いかゞは悲しき。舟人も皆子抱きてのゝしる。かゝるうちになほ悲しみに堪へずして、密に心知れる人といへりける歌。

うまれしもかへらぬものを我が宿に小松のあるを見るが悲しさ

とぞいへる。なほあかずやあらん、またなん。

見し人を松のちとせに見ましかば遠くかなしきわかれせましや

忘れ難く、口惜しきこと多かれど、えつくさず。とまれかうまれ、とくやりてん。

（土佐日記）

三河國八橋
三河國（愛知縣）碧海郡知立町の東、遇妻川の邊。
くもで
餉

八都鳥

一都鳥

昔男ありけり。その男身を益なきものに思ひなして、京にはをらじ、東の方にすむべき國もとめんとて行きけり。もとより友とする人、一人・二人していきけり。道しれる人もなくて、惑ひ行きけり。三河國八橋といふ所にいたりぬ。そこを八橋といひけるは、水ゆく河のくもでなれば、橋を八つ渡せるによりてなん八橋とはいへる。その澤の邊の木の蔭におりゐて、餉くひけり。その澤に燕子花いと面白く咲きたり。それを見て或人の曰く「かきつばたといふ五文字を句の上にす

唐衣
ほとぶ
駿河の國
今の靜岡縣の東部。
宇津の山
駿河國（靜岡縣）安倍郡と志太郡との間。
すゞろなるめ

ゑて、旅の心を詠め。」といひければ、詠める。

唐衣きつゝ馴れにしつましあればはるゝ來ぬる旅をしぞ思ふ

八橋

と詠めりければ、みな人、餉の上に涙落して、ほとびにけり。

行きくて駿河の國にいたりぬ。宇津の山に至りて、我が入らんとする道は、いと暗う細きに、蔦・楓はしげり、物心ぼそく、すゞろなるめを見る事と思ふに、修行者あひたり。「かゝる道にはいかでかいまする。」といふに、

つく
うつの山邊のうつつ
かのこまだら
比叡の山
京都市の東北に聳えてゐる山。海拔八四八米。
鹽尻

武藏の國
今の東京府はその一部。
下總の國
今の千葉縣の北部。
すみだ川
東京府及び東京市の東方を流れる河、昔は武藏國（東京府）と下總國（千葉縣）との境河であつた。

見ればみし人なりけり。京にその人の許にとて、文かきてつく。

駿河なるうつの山邊のうつゝにも夢にも人に逢はぬなりけり

富士山を見れば五月のつごもりに雪いと白う降れり。

時しらぬ山はふじの嶺いつとてかかのこまだらに雪の降るらん

その山は、こゝにたとへば、比叡の山を二十ばかり重ねあげたらん程して、なりは鹽尻のやうになんありける。

猶行き〳〵て、武藏の國と下總の國とのなかに、いと大きなる河あり。それをすみだ川といふ。その川の邊にむれゐて思ひやれば、かぎりなく遠くも來にけるかなと、わびあへるに、

名におふ
ありやなしや
小野
山城國（京都府）愛宕郡。
惟喬親王
文德天皇第一皇子、小野宮、寛平九年（一八九七）薨御、御年五十四。
水無瀨
攝津國（大阪府）三島郡島本村大字廣瀨の地。

渡守「はや舟に乘れ、日も暮れぬ。」といふに、乘りて渡らんとするに、みな人ものわびしくて、京に思ふ人なきにしもあらず。さる折しも、白き鳥の嘴と脚と赤き、鴎の大きさなる、水の上にあそびつゝ魚をくふ。京には見えぬ鳥なれば、みな人えしらず。渡守に問ひければ、「これなん都鳥。」といふを聞きて、

名にしおはばいざこと問はん都鳥わが思ふ人はありやなしやと

と詠めりければ、舟こぞりて泣きにけり。

二　小野の雪

昔惟喬親王と申す皇子おはしましけり。山崎のあなたに水無瀨といふ所に宮ありけり。年毎の櫻の花盛には、その宮

右の馬頭　右馬寮の長官、ことは業平のこと。
かゝれりけり
交野　河内國（大阪府）北河内郡。
挿頭
まし

へなむおはしましける。その時、右の馬頭なりける人を常にゐておはしましけり。時世經て久しくなりにければ、その人の名忘れにけり。狩はねんごろにもせで、大和歌にかゝれりけり。今狩する交野の渚の院の櫻ことにおもしろし。その木の下におりゐて、枝を折りて挿頭にさして、上・中・下みな歌よみけり。馬頭なりける人の詠める、

世の中にたえて櫻のなかりせば春の心はのどけからまし

となむよみたりける。又、人の歌、

散ればこそいとゞ櫻はめでたけれうき世になにか久しかるべき

とて、その木の下は立ちて歸るに日暮になりぬ。歸りて宮に

あらなむ―ありなむ
みぐしおろす

入らせたまひぬ。夜更くるまで、物語して、さて、あるじの親王入りたまひなむとす。十一日の月もかくれなむとすれば、かの馬頭よめる。

あかなくにまだきも月のかくるゝかなずもあらなむ
山の端にげて入れ

かうまつりけるを、皇子思ひの外にみぐしおろし給うてけり。

小野の雪　（吉村忠夫筆）

てしがな

伊勢物語
在五中將物語ともいふ、二卷、著者・成立年代未詳、主として在原業平の行跡を記した歌物語。

正月に拜み奉らむとて、小野にまうでたるに、比叡の山のふもとなれば、雪いと高し。強ひて御室にまうでて、拜み奉るに、つれづれといと物悲しくておはしければ、やゝ久しく侍ひて、古の事など思ひいでてきこえけり。さても、侍ひてしがなと思へど、おほやけ事どもありければ、え侍はで、夕ぐれにかへるとて、

忘れては夢かとぞ思ふ思ひきや雪ふみ分けて君を見むとは

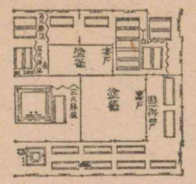
とてなむ、泣く〳〵來にける。

（伊勢物語）

かぐや姫
竹取物語の主人公。

六衛のつかさ
六衛府即ち左右近衛府・左右兵衛府・左右衛門府の役人。

塗籠



いはく……といふ

九月の都

かぐや姫天に昇るべき十五日、司々に仰せて、勅使には少將高野大國といふ人をさして、六衛のつかさ合はせて二千人の人を、竹取が家に遣はす。家に罷りて、築地の上に千人、屋の上に千人、家の人々いと多かりけるに合はせて、あける隙もなく守らす。この守る人々も弓箭を帶して居り。母屋の内には、女どもを番にすゑて守らす。嫗、塗籠の内にかぐや姫を抱かへてをり。翁も塗籠の戸をさして戸口に居り。翁のいはく、「かばかり守るところに、天の人にもまけんや。」といひて、屋の上にをる人々にいはく、「つゆも、物空にかけらば、ふと射殺し給へ。」守る人々のいはく、「かばかりして守るところに、蝙蝠一つだに

したくみ
人をえ戰はず
さが髪
子の時

あらば、まづ射殺して外にさらさんと思ひ侍る。」といふ。翁これを聞きて、頼しがり居り。これを聞きてかぐや姫は、「さし籠めて守り戰ふべきしたくみをしたりとも、あの國の人をえ戰はぬなり。弓箭して射られじ。かくさし籠めてありとも、かの國の人來ば、皆あきなんとす。相戰はんとすとも、かの國の人來なば、猛き心つかふ人よもあらじ。」翁のいふやう、「御迎に來ん人をば、長き爪して眼をつかみつぶさむ。さが髪をとりてかなぐり落さむ。さが尻をかき出でて、こゝらのおほやけ人に見せて恥見せむ。」と腹立ちをり。

かゝるほどに、宵うち過ぎて子の時ばかりに、家のあたり晝のあかさにも過ぎて光りたり。望月のあかさを十あはせたるばかりにて、在る人の毛の孔さへ見ゆるほどなり。大空より人雲に乘りており來て、地より五尺ばかりあがりたるほどに立連ねたり。これを見て、内外なる人の心ども、物におそはるゝやうにて、相戰はん心もなかりけり。辛うじて思ひ起して、弓箭を取りたてんとすれども、手に力もなくなりて、なえかゞまりたる中に、心さかしき者、念じて射むとすれども、外ざまへ行

念ず

かぐや姫の昇天　（吉村忠夫畫）

しれにしれて　羅蓋

造麿　竹取翁の名。まうで來をさなき人

きければ、荒れも戰はで、心地たゞしれにしれて、まもりあへり。立てる人どもは、裝束の清らなること、物にも似ず。飛ぶ車一つ具したり。羅蓋さしたり。その中に王と覺しき人、家に、「造麿まうで來。」といふに、猛く思ひつる造麿も、ものに醉ひたる心地して、うつぶしに伏せり。いはく、「汝、をさなき人、聊かなる功德を翁つくりけるによりて、汝が助にとて片時のほどとて降ししを、そこらの年來、そこらの金たまひて、身をかへたるが如くなりにたり。かぐや姫は罪をつくり給へりければ、かく賤しきおのれが許にしばしおはしつるなり。罪のかぎりはてぬれば、かく迎ふるを翁は泣嘆く、あたはぬことなり。はや返し奉れ。」といふ。翁答へて申す、「かぐや姫を養ひ奉ること、二十年あまりになりぬ。片時と宣ふに、怪しくなりはべりぬ。ま

おはせね

たことどころにかぐや姫と申す人ぞおはしますらむ。」といふ。「こゝにおはするかぐや姫は、重き病をし給へば、え出でおはしますまじ。」と申せば、その返事はなくて、屋の上に飛ぶ車をよせて、「いざかぐや姫、きたなき所にいかで久しくおはせむ。」といふ。立てこめたるところの戸、卽ちたゞあきにあきぬ。格子ども も人はなくしてあきぬ。嫗抱きてゐたるかぐや姫外に出でぬ。えとゞむまじければ、たゞさし仰ぎて泣きをり。

竹取心惑ひて泣伏せる所に寄りて、かぐや姫いふ、「こゝにも心にもあらでかくまかるに、昇らんをだに見送り給へ。」といへども、「何しに、悲しきに見送り奉らん。我をばいかにせよとて、棄てては昇り給ふぞ。具して率ておはせね。」と泣きて伏せれば、御心まどひぬ。「文を書きおきてまからむ。戀ひしからん

書くことは：書きおく

天の羽衣　重き六銖、經緯が無いといふ、これを着ると飛行の自在を得るといふ。

をり〳〵、取出でて見給へ。」とて、うち泣きて書くことは、

「この國に生まれぬるとならば、嘆かせ奉らぬほどまで侍るべきを、侍らで過別れぬること、返す〳〵本意なくこそ覺え侍れ。脱ぎおく衣をかたみと見給へ。月の出でたらむ夜は見おこせ給へ。見すて奉りてまかる空よりも落ちぬべき心地す。」

と書きおく。天人（あまびと）の中にもたせたる筥あり。天の羽衣入れり。又、あるは不死の薬入れり。ひとりの天人いふ、「壺なる御薬奉れ。きたなき所のもの食（きこ）しめしたれば、御（おん）心地あしからんものぞ。」とて、持てよりたれば、聊か嘗給ひて、少しかたみとて、ぬぎおく衣に包まんとすれば、ある天人包ませず、御（おん）衣（ぞ）を取出でて着せむとす。その時にかぐや姫、「しばし待て。」といひて、「衣

いひて……いひて

なめげなり

著つる人は心ことになるなり。物一言いひおくべき事あり。」といひて、文書く。天人、「おそし。」と心もとながり給ふ。かぐや姫、「もの知らぬことな宣ひそ。」とて、いみじく靜かにおほやけに御文奉り給ふ。あわてぬさまなり。

「かく數多の人をたまひて留めさせ給へど、許さぬ迎まうで來て、とりゐて罷りぬれば、口惜しく悲しきこと。宮仕つかうまつらずなりぬるも、かくわづらはしき身にて侍れば、心得ず思し召しつらめども、心づよく承らずなりにしこと、なめげなるものに思し召し止められぬるなむ、心にとまり侍りぬる。」

とて、

いまはとて天の羽衣きるをりぞ君をあはれとおもひ

頭中將

竹取物語
著者未詳、一名かぐや姫物語、平安朝時代初期傳奇物語、源氏物語に物語のいで來はじめの親といはれてゐる。

出でぬる

とて、壺の藥添へて、頭中將を呼寄せて奉らす。中將に天人とりて傳ふ。中將とりつれば、ふと天の羽衣うち著せ奉りつれば翁をいとほし悲しと思しつることも失せぬ。この衣著つる人は、物思もなくなりにければ、車に乘りて、百人ばかり天人具して昇りぬ。その後翁・嫗、血の涙を流して惑へどかひなし。あの書きおきし文を讀みて聞かせけれど、「何せむにか命も惜しからむ。誰が爲にか何事も益もなし。」とて藥もくはず、やがて起きもあがらず病み臥せり。中將人々を引具して歸り參りてかぐや姫をえ戰ひ留めずなりぬることをこまゝと奏す。藥の壺に御文そへて參らす。展げて御覽じて、いといたく哀れがらせ給ふ。

（竹取物語）

吉澤義則
京都市の人、文學博士、國語國文學者、京都帝國大學名譽教授、明治九年（一八七六）生。

時期區分

一〇　國語の變遷

吉澤義則

言語は絶えず變化してゐる。しかも、其の變化は急激に現れるものではなく、極めて徐々に連續的に行はれて行くものである。從つて、國語の歷史についても、その時期區分をする事は頗る困難である。紀元何年を境として、それ以前がどう、それ以後がどうといふやうな、明確な區分は勿論出來ることではない。しかし、吾々は國語變遷のあとを通覽する時に、おぼろげながらも、或色の濃い部分と他の色の濃い部分とがあるやうに感じる。その境界はぼかされてゐて、何處と明確には指し難いけれども、その色の濃いと思はれる部分々々を中心として見れば、やはり、或る程度までは時期の區分が出來る

史料

政治史

招致する

漢字の傳來
應神天皇の十六年(九四五)百濟王が王仁をして論語・千字文を奉らしめたのが、國史に見える最初である。

外來語

やうに思はれる。而して、其の區分は、史料の少い奈良朝以前はさておいて、それ以後を大體、上古(奈良朝時代)・中古(平安朝時代)・近古(鎌倉・室町時代)・近世(江戸時代)・現代(明治以後)といふやうに、政治史のそれに準據して、甚だしく不自然ではないやうである。畢竟、政治上の變革、政治中心の移動は人心の動搖を招致するものであり、人心の動搖は言語の上に反映せずにはおかないからである。左に國語變遷の跡を大觀して見よう。

奈良朝時代とは漢字の傳來以後約五百年の間をさすのであるが、この時代は、漢文學や佛教も盛であり、制度・文物すべて外國のものを取入れるに急な時代であつたから、外來語の國語に取入れられた數も、非常に多かつたことと思はれるが、歌の上にあらはれたものは極めて少い。散文の中には割合に

語彙

平安奠都
延曆十三年(七九四)。

鎌倉に移る
頼朝が幕府を開いたのは建久三年(一八九二)。

古今集勅撰
醍醐天皇の延喜五年(九〇五)に紀貫之・紀友則・凡河内躬恒・壬生忠岑等が勅を奉じて撰進した。

多く見えるが、それもすべて名詞としての資格を與へられてゐるものばかりである。わが國語には限らないが、外來語の輸入は、殆どその國語の語彙を富ますだけで、語法が影響を受けることは極めて少いものである。

平安朝時代は、平安奠都から約四百年、政治の中心が鎌倉に移るまでの間をいふ。前代に引きつゞいて重んぜられた漢文學が一時全盛を極めた結果として、和歌の暗黑時代を現出したが、やうやく國粹に目覺めては和歌の復興となり、遂には古今集勅撰まで展開していつた。平假名・片假名は萬葉假名から脱化して、國語の表記は愈〻便利になつた。そこに、散文の文學が發達し、國語は愈〻精錬せられた。

和歌の用語は、前代から或意識をもつて選ばれたのである

朱雀天皇
第六十一代、天暦六年(九五二)崩御、御年三十。

促音便
長音便

が、この時代になつては愈〻限定せられて、話語とはます〳〵距離が出來た。たゞに和歌の用語ばかりでなく、散文の用語も朱雀天皇の頃からは次第に話語から離れる傾向を持つたらしい。かくて、平安朝時代の末に至つては、和歌・散文の用語と話語との距離が益〻遠くなり、平安朝盛時の言語は、以後、長く文語の標準となる程話語と離れてしまつたのである。この時代、引續き漢語が輸入せられて、形容詞・動詞・副詞等にも用ひられるやうになつた。それが、殆ど國語化した姿をもつて、物語などにも現れてゐる。

この時代の末は所謂院政時代である。この頃になると、促音便やハ行四段・マ行四段の動詞の長音便が現れ、二段活用の一段化の傾向もやゝ強くなり、また、連體形の終止形同化の傾

藤原氏
天兒屋根命の末、藤原鎌足を祖とする。

跋扈する

和漢混淆

向も生じて、次の時代に於ける大變化を豫想せしめてゐる。

藤原氏の勢力が衰へ、武士が漸く實力を得始めたことなどから、地方語が京都語に影響する事が多くなつた結果であらうといはれてゐる。

鎌倉・室町時代は、鎌倉幕府時代・吉野朝時代・室町幕府時代を含んだ約四百年間で、要するに武士の跋扈した時代である。この時代は、概していへば、戰亂多く、人心は定らず、學問・文藝不振の時代であつた。文語と話語との懸隔は益〻甚だしくなつたが、その文語も和歌はとにかく、散文に至つては、完全に前代のものを摸しきることが出來ないで、所々に當時の話語の面影を覗かせてゐる。一方には又、漢文脈を多分に取入れた和漢混淆の文章が發達して、漢語の國語に入來るものは愈〻多く

なつた。漢語は、かうした文字の上から移植せられた外に、この時代には、主として禪僧によつて、直接支那から輸入せられたものが少くない。例へば、普請・行燈の類である。話語に於ては院政時代にあらはれた變化の傾向が現實相となつて現れ、その初期から、助動詞「た」(過去)、「う」(未來)、助詞「で」(にての意)のやうな新しい形を發生して、まさに京都語の大混亂時代であり、文語の衰頽時代であり、近代語形發達の時代であつた。そこには武士の用語、殊に關東方言などの影響が多分にあつたものと考へられる。

江戸時代は、江戸幕府の時代約三百年で、戰亂既に治り、人々太平を樂しんだ時代である。この時代は、室町時代の言語を承けて話語の整理せられた時代といふべく、動詞では「落つる」

還元する

雅醇

「受くる」等の二段活用の形は漸次滅亡して、「落ちる」「受ける」等の一段活用に統一せられ、音便では「忍うで」「賴うで」等、バ行四段・マ行四段の長音便が廢退して、「忍んで」「賴んで」等の撥音便が進出し、關東語が勢力を得て後は、「流いて」の如きサ行四段のイ音便はもとの形に還元せられた。助動詞「よう」(未來)「です」(指定)等の發達もあるが、三百年を通じて、概しては甚だしい變化を見ない時代である。方言では、江戸の發展と共に江戸言葉が發達し、次第に勢力を得て、文藝上では今まで關西方言の爲に虐げられてゐた關東方言の爲に氣を吐くに至つた。江戸時代の文語は、大體に於て前代の繼承であつたが、元祿頃から振るひ興つた國學者は、雅醇な古の國語に憬れて、その國語相を己等の時代に再現しようとまで努力した。併し、一方には又、國語

明治二十年
紀元二五四七年。
言文一致
試錬彫琢

後奈良天皇
第百五代、弘治三年崩御、御年六十二。
天文十二年
紀元三二〇五年。

に無關心な漢學者があつて、其の漢籍の讀み方は國語を混亂せしめた事も多かつた。

明治の普通文は、實に漢文讀下しの影響を受けたものであつたのであるが、明治二十年代から動き始めた言文一致更生の機運は、花を開き、實を結び、種々試錬彫琢を經た後、大正時代に入つては、威嚴の不足感から容易に採用せられなかつた新聞の論說などにまで、口語文が採用せられるやうになつて、文語文はだん〳〵影を潛めて來た。

後奈良天皇の天文十二年に、三人のポルトガル人が大隅の種子島に漂着したのを初として、ポルトガル・イスパニヤ・オランダ等の西歐諸國との交渉が起り、宗教や文學等種々のものが輸入せられるにつれて、それらの國の語も亦我が國語の中

ラシヤ
毛織物の名、ポルトガル語。
カステイラ
菓子の名、イスパニヤ語。
ギヤマン
「硝子」の意、オランダ語。

に入つて來るやうになつた。ラシヤ・カステイラ・ギヤマン等はその一例である。併し、江戸時代は鎖國政策の爲に、それらの語の輸入はさまで甚だしくはなかつたが、明治に至つては、進んだ歐米の文化を輸入するのにこれ日も足らぬ有樣であつた。かくて歐米語の我が國語の中に入來つた數も夥しいものがあり、なほ引續いて現代にも及んでゐる狀態である。それらの外國語は、英米語・獨逸語・佛蘭西語等が主なものであるが、中にも英米語がその首にあることは、インキ・ペン・ナイフ・ハンケチ・マツチ等、吾等の周圍の日常用品の名について見ただけでも明らかなことであらう。

外國語や外國語格を取り入れる事は、國語を豐富にし、表現に新しみを加へる利點もあるが、その濫用は國語の純正を害

日本アルプス　飛騨・木曾・赤石の三山塊につけた稱、飛騨山脈を北アルプス、木曾山脈の駒ケ峰・連峰を中央アルプス、赤石山脈を南アルプスとする。

日本ライン　木曾川が、犬山城附近を流れて峽谷を成し、斷崖絶壁の奇觀を呈してゐる、約一一粁の間を指す。

東西二大方言　明治三十九年（一九〇六）文部省が國語調査會から發表した「口語法調査報告書」及び「口語法分布圖」に於ては、越中（富山縣）・飛騨（岐阜縣）・美濃（岐阜縣）の東境に沿うて境界線を引き、この線以東の方言を東方言とし、以西の方言を西方言としてある。

するもので、嚴に戒めなければならぬ事である。名山・名川には日本アルプス・日本ラインの如く外國名をつけ、國產品にも片假名で西洋流の名をつけて得々としてゐる現代は、誠に外國語濫用の時代だといはれよう。吾等の周圍には西洋風の名をつけたものが如何に多くある事か。これでは既に精神的に彼等に屈服して了つてゐるといふべきで、世界諸國の上に立つて、世界の文化を指揮する事はまだ〳〵前途遼遠だといはねばならぬ。

さて、國語は上述の如くそれ自身の動きにより、又、外國語を取入れる事によつて、幾變轉した。併し、其の根柢の本質は少しも變つて居らぬ。どこまでも我等祖先の精神がその中に生活したところの國語である。東西二大方言の中にも、亦、多くの小さな方言を有する。併し、それも畢竟根幹を得て茂る枝葉である。我等は今も其の中に住して、縱には祖先の心を受け、横には同胞相結ぶ。國語は、實に一國の標識であり、國體を維持し國民を結合する精神的の鎖である。之を世界の歷史に見るに、一國の國語の消長は、その國の國勢の消長に緊密な交渉を有つてゐる。故に、我等は現代の外國語濫用を悲しむと共に、方言の統一が遲々として行はれぬ事をも悲しまなければならぬ。方言は國語の表面だけの相違ではあるにしても、その相違は國語の力を殺ぐ事が極めて大きいものである。而して、方言の統一は、學校に於ける國語教育だけで出來るものではない。新聞・雜誌・文學作品等も與つて力はあるものの、猶それだけでは出來るものではない。要は國民全體の

國語史概說
吉澤義則著、國語史の大體を述べ、主として國語の音韻・語法についてその變遷の大綱を記述したもの、昭和六年（一九三一）二月刊行。

自覺と努力とに俟たねばならぬのである。

現在は、大體東京語が標準になつてはゐるが、未だ標準語の問題は明確に具體的に解決せられては居らぬ。方言統一に向かつて進むに方つて、まづ必要な道標は標準語でなければならない。更に國語を純正ならしむるには如何にすべきか。漢字と共に取入れられた無數の漢語、近世以後取入れられた多くの歐米語、これ等の整理を如何にすべきか。又、表記上の問題としては、文字を如何にすべきか、假名遣を如何にすべきか。これ等はすべて國民全體の自覺に俟たなければ解決せられぬ事柄である。國語の愛護、それは一部の學者間にのみ唱へられて、未だ國民全體の聲とならぬのを悲しむ。

（國語史概說）

萬葉集
二十卷、撰者未詳、或は大伴家持といふ、我が國最古の歌集、仁德天皇の元年（九三）から、淳仁天皇の天平寶字三年（四五九）まで凡そ四百四十六年間の歌約四千五百首を收めてゐる。

田兒の浦ゆ
山部赤人、萬葉集卷三。

田兒の浦
駿河國（靜岡縣）富士川口附近の海岸、北に富士山を仰ぎ、西に三保の松原を望む。

賀茂眞淵
通稱岡部衞士、縣居と稱す、遠江國（靜岡縣）の人、國學者、四大人の一、明和六年（一七六九）歿、年七十三。

ふしあり
いまだし
苦しくも
長忌寸奥麻呂、萬葉集卷三。

一一 萬葉集の精神

編者

田兒の浦ゆうち出でて見れば眞白にぞ富士の高嶺に雪はふりける

この歌を賀茂眞淵翁が評して、「大かたの人一節を思ひ得て本末をつゞくるぞ常なるを、古へ人は直にいひつらねしぞ多き。そが中に赤人はことにふしあるはいまだしく心ひくき事と思ひけん、かく、うち見る樣をそのまゝにいひつゞけたるなり。さてめでたく妙に聞ゆるが故に昔より名高きなり。」と言つてゐる。「ふしあるはいまだしく心ひくき事」と言つた言葉は、誠に萬葉の精神に觸得たものの言と言はねばならぬ。

苦しくも降來る雨か三輪が崎佐野のわたりに家もあら

三輪が崎　和歌山縣東牟婁郡三輪崎町の岬角なる三輪崎の古稱といふ。

駒とめて　藤原定家、新古今集卷六。

佐野　和歌山縣東牟婁郡三輪崎村の大字。

久方の　柿本人麿、萬葉集卷十。

ほのぼのと　後鳥羽上皇、新古今集卷一。

天の香具山　香具山、大和國（奈良縣）磯城郡香久山村、大和三山の一、高さ五四米弱。（一〇〇頁地圖參照）

新古今　二十卷、建仁元年（一二〇一）後鳥羽上皇の院宣を蒙つて、藤原定家等が元久二年（一二〇五）撰進した勅撰和歌集。

なくに

三輪崎

駒とめて袖うち拂ふかげもなし佐野のわたりの雪の夕暮

久方の天の香具山この夕べ霞たなびく春立つらしも

ほのぼのと春こそ空に來にけらし天の香具山霞たなびく

この萬葉と新古今と類似の作を比較する時、新古今の二作も當代を代表する名歌ながら、それと對照することによつて、眞淵の認めた萬葉の精神は一層鮮に感ずることが出來るであらう。

夕されば小倉の山に鳴く鹿は　舒明天皇、萬葉集卷八。

小倉の山　不明であるが、古來龍田の小倉山のことだらうといふ、大和國（奈良縣）平群郡立野村の西の山。

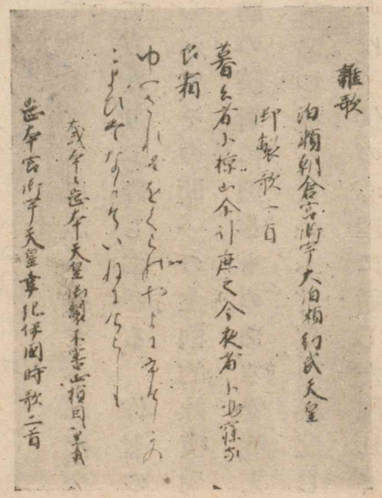
夕されば小倉の山に伏す鹿の　雄略天皇、萬葉集卷九。

右は萬葉と新古今との對照であるが、同じ萬葉にあつても、

夕されば小倉の山に鳴く鹿は今宵は鳴かずいねにけらしも

夕されば小倉の山に伏す鹿の今宵は鳴かぬいねにけらしも

とある兩首を比較して「鳴く鹿は今宵は鳴かず」の句に比して、「伏す鹿の今宵は鳴かぬ」の句の表現技巧に心惹かれると感ずる者は、いまだ萬葉の精神を會得する事の出來ない人だと思ふ。素直なる心はまた素直なる表現を求める。



（藍紙本萬葉集）

みたたしの
皇子尊（日並皇子を申す）の舍人等、萬葉集卷二。
島
家にあれば
有間皇子、萬葉集卷二。
笥
端的に
島木赤彦
本名久保田俊彦、長野縣の人、歌人、大正十五年（一九二六）歿、年五十一。
證徵

みたたしの島のありそを今見れば生ひざりし草生ひにけるかも

家にあれば笥に盛る飯を草枕旅にしあれば椎の葉に盛る

眞淵翁は、また後者を「さて思ふまゝに詠みたまへれば、今唱ふるに只管思ひはかられて哀なり。」と評してゐる。作者の實感が素直に端的に表現せられて、その間一の主觀的詠嘆句を交へずして、しかも、深い感動の讀者に迫るものあるを覺えるであらう。島木赤彦氏も、後者の「盛る」といふ言葉の繰返しに注意して、「同じ詞を繰返すのは、子供の心理に通じた現れである。萬葉初期にこの句法の多いことは、當時の歌の素樸さを現す一つの證徵である。」と述べてゐる。しかも又、その子供の

我が里に
天武天皇、萬葉集卷二。
大原
大和國（奈良縣）高市郡飛鳥村大字小原。
ふらまく
わが岡の
藤原夫人、「我が里に」にこたへ奉る歌。
おかみ
いなといへど
持統天皇、萬葉集卷三。
志斐
姓。
の
しひがたり
いなといへどかたれ
志斐嫗、天皇の「いなといへど」にこたへ奉る歌。
い

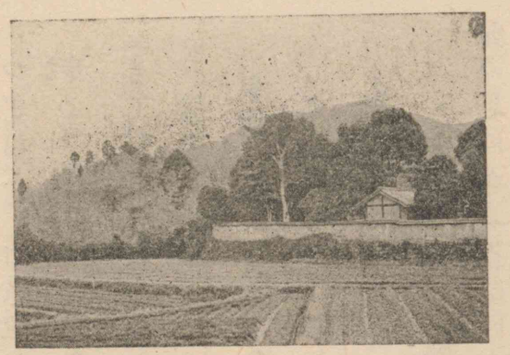
心理に通じる上代人の心の素樸さは、又同時に、明かるい朗な心の持主であることを思はしめる。

我が里に大雪ふれり大原のふりにし里にふらまくは後

わが岡のおかみにいひて降らしめし雪のくだけしそこに散りけむ

いなといへどしふる志斐ののしひがたりこの頃聞かずてわれ戀ひにけり

いなといへどかたれ〳〵と詔らせこそ志斐いは奏せしひがたりと詔る



大原の里

眞實一圖の心
ひたぶるな心
つぎねふ
作者未詳、萬葉集卷十三。
泣かゆ
まそみ鏡
蜻蛉領巾
おひなみ持つ
反歌
なづみ行く

しかも、この朗さ、この尊い君臣和樂の心の奥にひそむものは、眞實一圖の心である。ひたぶるな心である。

つぎねふ　山城道を　他夫の　馬より行くに　己夫し
歩より行けば　見る毎に　ねのみし泣かゆ　そこ思ふに
心し痛し　たらちねの　母が形見と　わが持てる　まそ
み鏡に　蜻蛉領巾　おひなみ持ちて　馬買へわが背

反歌

まそ鏡もてれどわれはしるしなし君が歩よりなづみ
行く見れば

この歌をまた眞淵翁は、「例の理窟人のいへらく、『母が形見を愛の思にかふるはいかに。』と。己笑うてこたふ。女は夫の家を家とするに、その夫貧しかる時、猶母が形見の寶をたくはへ

澄入る心
みよし野の・ぬば
たまの
山部赤人、萬葉集卷六。
象山
大和國（奈良縣）吉野郡國栖村大字喜佐谷（一〇〇頁地圖參照）にある象の小川にそへる山の名。
こゝだ
久木
あかめがしはといはれる落葉喬木。

しば鳴く

んかは。いま此の言を擧げて歎くは眞なり。これをはなつは夫に二心なきなり。古人は思はずして道にかなへり。」と論じてゐる。理窟を絶した眞實な心である。しかも、そのひたぶるの心は、又一點に澄入る心でもある。單純清澄を求める心である。

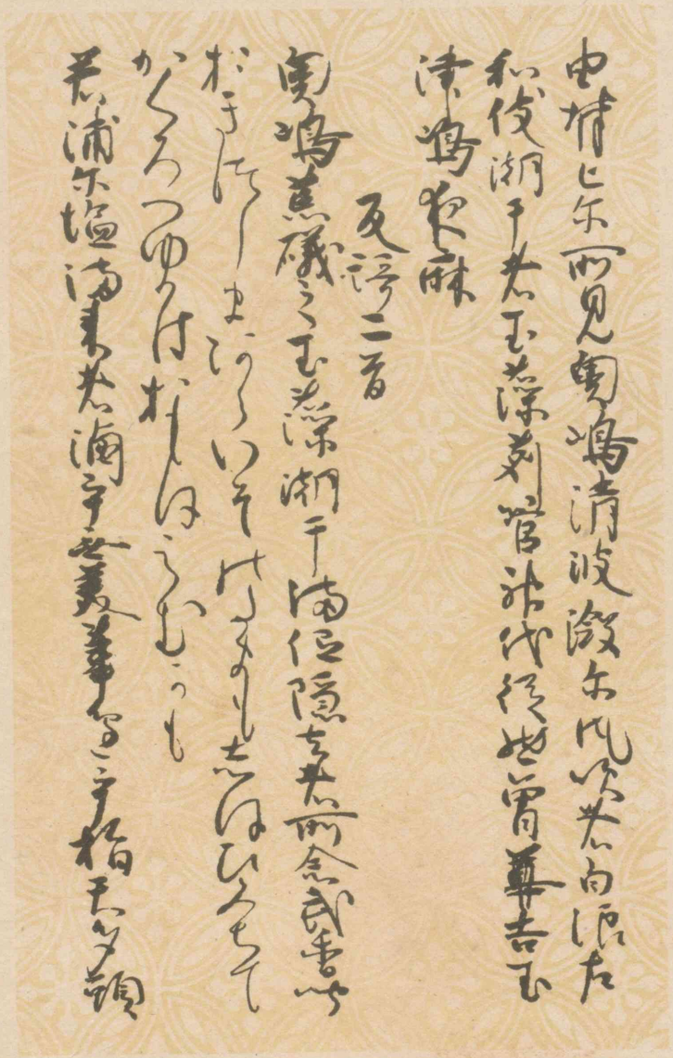
單純の美に就いては、既に前にあげた數首の歌の中にも、十分之を認める事が出來たであらうと思ふ。なほ、最後に單純清澄の境に入つた作二首をあげよう。

みよし野の象山の間の木ぬれにはこゝだもさわぐ鳥
の聲かも

ぬばたまの夜のふけゆけば久木生ふる清き河原に千
鳥しば鳴く

前者を島木赤彦氏が評して「一首の意至簡にして澄入る所が自ら天地の寂寥相に合してゐる。騒ぐというて却つて寂しく、鳥の聲が多いというて愈寂しいのは、歌の姿がその寂しさに調子を合はせ得るまでに至純であるためである。」と述べてゐる。

近代の女性に「明朗であれ。」と叫ばれる聲を私は聞く。それは確に正しい要求である。しかし、その明朗さは、一夜の風雨にも忽ち萎凋む室咲きの切花のやうなものであつてはならぬ。大地の中にしつかりと「眞實」の根を下し、「素直な」「ひたぶるな」幹の上に、やがて「至純」な實を結ぶべく咲出でた「明朗」の花でなければならぬ。物質文明の進む事も勿論喜ばしい事にはちがひない。しかし、その「文化」の惠澤に無批判に醉ふ時、人は



金澤本萬葉集

春の野に
萬葉集卷八。

高圓の
卷二。

何よりも大切な自らの魂のありかを失ふに至るであらう。萬葉集の尊重すべきは、それが我が和歌史上に於ける最もすぐれた作品集たるにあること言ふまでもない。しかし、私達がこの集に特に心惹かれる所以は、現代のあわたゞしい亂雜な溷濁した環境の中に、ともすればそのゆく方を失はうとする、われ〳〵の魂のふるさとを、この集の中に見出す事が出來るからである。

春の野に菫摘みにと來し吾ぞ野をなつかしみ　（山部赤人）
一夜ねにける
高圓の野邊の秋萩いたづらに咲きか散るらむ　（笠金村歌集）
見る人無しに

額田王　鏡王女の妹、十市皇女の母、上代女流の代表的作家。

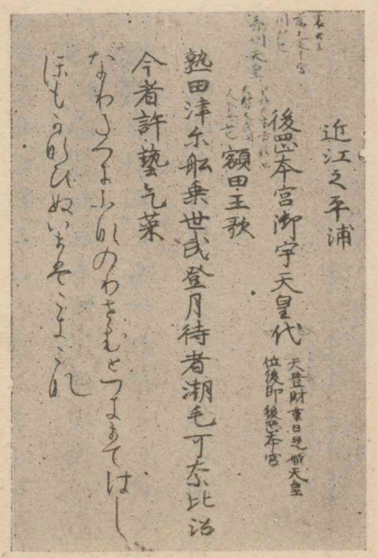
熟田津　昔伊豫國（愛媛縣）道後温泉附近にあつた要津といふ。

天皇　持統天皇。

志貴皇子　天智天皇第七皇子、萬葉集には靈龜元年（一三五）薨とある。

一三 萬葉集抄

額田王の歌



（元暦校本萬葉集）

熟田津に船乗りせむと月待てば潮もかなひぬ今は漕ぎ出でな（卷一）

石ばしる垂水　摂津國、今の大阪府吹田町の西、垂水神社のあたりか。

近江の荒都　天智天皇の舊都、近江國（滋賀縣）辛崎に近い滋賀村の南滋賀の地。

柿本朝臣人麻呂　持統・文武兩天皇の朝に仕へ、和銅二、三年（一三六―一三七〇）に死んだやうである、年齢未詳。

玉だすき　畝火の山　大和國（奈良縣）高市郡白橿村にある、大和三山の一。（一三二頁地圖參照）

橿原のひじりの御世　神武天皇の御代。

樛の木のそらにみつ

天皇の御製歌

春過ぎて夏來るらし白妙の衣ほしたり天の香具山（卷一）

志貴皇子の懽の御歌

石ばしる垂水の上のさ蕨の萌出づる春になりにけるかも（卷八）

近江の荒都を過ぐる時、柿本朝臣人麻呂の作れる歌

玉だすき　畝火の山の　橿原の　ひじりの御世ゆ
生れましし　神のことごと　樛の木の　いやつぎ
つぎに　天の下　しろしめしし　そらにみつ

奈良山
昔の奈良の都の北に、東西に連なつてゐる連丘。（一〇〇頁地圖參照）
天さかる
大津宮
滋賀の地。
霧る
うぢ河
京都府の南部を流れる川、源を琵琶湖に發し、上流を瀨田川といひ、宇治に入つて宇治川といひ、久世郡淀町に至つて淀川と稱する、流程八〇粁。
網代木
いさよふ

大和をおきて　あをによし　奈良山を越え　いかさまに　おもほしめせか　天さかる　ひなにはあれど　いはばしの　近江の國の　さゝなみの　大津の宮に　天の下　しろしめしけむ　天皇の　神の尊の　大宮は　こゝと聞けども　大殿は　こゝと言へども　春草の　茂く生ひたる　霞立つ　春日の霧れる　もゝしきの　大宮處　見れば悲しも（卷一）

柿本朝臣人麻呂近江國より上り來る時、宇治河の邊に至りて作れる歌一首

ものゝふの八十うぢ河の網代木にいさよふ浪のゆくへ知らずも（卷三）

柿本朝臣人麻呂の歌一首

しぬに
なべに
弓月が嶽
大和國（奈良縣）磯城郡卷向山の一峰。（一〇〇頁地圖參照）
ぬばたまの
卷向
卷向山。（一〇〇頁地圖參照）
高市連黑人
持統・文武兩天皇に仕ふ、傳未詳。
四極山
今の大阪市住吉附近とする說と、三河國（愛知縣）渥美郡の西、吉田村附近の山とする說と二說ある。
笠縫の島
前說と同樣二說ある。

あふみの海夕浪千鳥汝が鳴けば心もしぬにいにしへ思ほゆ（卷三）

雲を詠める

あしひきの山河の瀨のなるなべに弓月が嶽に雲立ち渡る（卷七）

河を詠める

ぬばたまの夜さり來れば卷向の川音高しも嵐かも疾き（卷七）

右二首柿本朝臣人麻呂歌集に出づ

高市連黑人の羇旅の歌

四極山うち越え見れば笠縫の島漕ぎかくる棚無し小舟（卷三）

春日の山　奈良市の東にある山。

とを〻（たわ〻）

山部宿禰赤人　傳未詳。

不盡山　富士山。

かくろひ。

い行く

時じく

黄葉を詠める

九月の時雨の雨にぬれとほり春日の山は色づきにけり（卷十）

露を詠める

秋萩の枝もとを〻に露霜おき寒くも時はなりにけるかも（卷十）

山部宿禰赤人不盡山を望める歌一首

天地の　分かれし時ゆ　神さびて　高く貴き　駿河なる　富士の高嶺を　天の原　ふりさけ見れば　わたる日の　影もかくろひ　照る月の　光も見えず　白雲も　い行きはゞかり　時じくぞ　雪は降りける　語りつぎ　言ひつぎ行かむ　富士の高嶺は（卷三）

百濟野　大和國（奈良縣）北葛城郡百濟村大字百濟の地。

子等を思ふ歌

山上憶良の作。

山上憶良　伯耆守・筑前守等に歷任した、天平五年（一三三）卒、年七十四。

もとな

太宰帥大伴卿　大伴旅人、大伴安麻呂の長男、天平三年（一三一）薨、年六十七。

山部宿禰赤人の作れる歌

百濟野の萩の古枝に春待つと居りし鶯鳴きにけむかも（卷八）

子等を思ふ歌

瓜食めば　子等思ほゆ　栗食めば　ましてしぬばゆ　何處より　來りしものぞ　眼交に　もとなかかりて　やすいしなさぬ（卷五）

反歌

銀も金も玉も何せむにまされる寶子にしかめやも（卷五）

太宰帥大伴卿冬の日雪を見て京を憶

ほどろ〳〵に降りしく

小野老
天平十年（一三九八）卒。

六年
天平六年（一三九四）。

海犬養宿禰岡麿
傳記未詳。

逢へらく

湯原王
志貴皇子の第二子。

夏實の河
大和國（奈良縣）吉野郡中莊村大字菜摘、宮瀧の東、この邊での吉野川の稱。

ふ歌

あわ雪のほどろ〳〵に降りしけば平城の京師し思ほゆるかも（卷八）

太宰少貳小野老朝臣の歌

あをによし奈良の都は咲く花の薫ふが如く今盛りなり（卷三）

六年甲戌海犬養宿禰岡麿詔に應ずる歌

御民われ生ける驗あり天地の榮ゆる時に逢へらく思へば（卷六）

湯原王芳野にて作れる歌

芳野なる夏實の河の川淀に鴨ぞ鳴くなる山かげに

同月十一日
天平十六年（一四〇四）正月。

活道岡
山城國（京都府）相樂郡西和東村大字白栖の東方の山。

市原王
安貴王の御子。

二十三日
天平勝寶五年（一四一三）二月。

春の野に・わがやどの
この二首大伴家持の作。大伴家持、旅人の子、國守を歷任し、中納言にまで進む、延曆四年（一四四五）薨、享年未詳。

いさゝ群竹

して（卷三）

同月十一日活道岡に登り一株の松の下に集ひて飲せる歌

一つ松幾代か經ぬる吹く風の聲の澄めるは年深みかも（卷六）

右一首市原王

二十三日興に依つて作れる歌

春の野に霞たなびきうら悲し此の夕かげに鶯鳴くも（卷十九）

わがやどのいさゝ群竹吹く風の音のかそけきこの夕べかも（卷十九）

武田祐吉
東京市の人、國文學者、文學博士、國學院大學教授、明治十九年（一八八六）生。

溶合す
分布す
醸成す
文獻

一三　大和國原

武田祐吉

わが上代文學には、日本群島に居住してゐた諸民族の間に發生し生育した所の文化の痕跡を止めて居る。しかし、古代に於て、その諸民族が未だ溶合せずして各地に分布して居た時に當り、大和の國に居を占めてゐた所謂大和民族の間には、既にその固有の文化が醸成せられてゐたので、その文學が遂に國文學の主流をなすに至り、爾來悠々三千年、わが國文學史を貫流したのである。かくて、大和の國は永い間の文化の中心地となつた爲に、上代文學に關する文獻は殆どこの地に於て成立したのである。

神武天皇が皇居を橿原の地に奠め給うてから、千三百數十

聚落

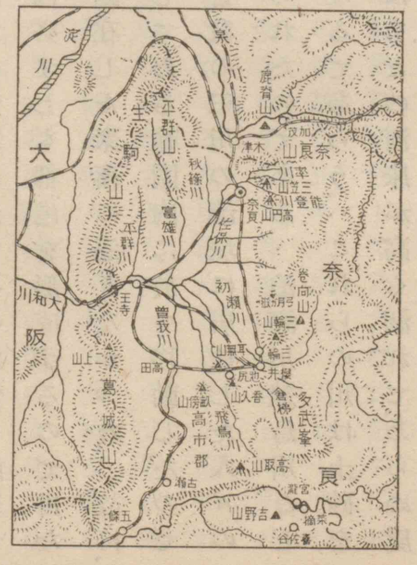
飛鳥川の淵瀬
五一頁頭註參照。

埴安の池
今は香具山村大字南浦にその跡がある。

年、歴朝おほむね高市・十市・磯城の三郡の中に都せられて、他郷に移つたことは寧ろ稀であつた。當時の皇居は一代ごとに處を異にして宮殿を營んだのであるから、その造營も簡單であつた。皇居の所在地は必ずしも都邑を形成するのではなく、國民が集團をなして點在した聚落に過ぎなかつた。故に、皇居はその集團の散在してゐる範圍内に於て移動したのである。かくて泊瀬・飛鳥・曾我の三川の流域に居住した人々の間に原始文藝は養育せられたのである。泊瀬川・飛鳥川などの流域は、昔と今とは異なるであらう。これらの川は土砂を押流すので、大雨の後にはもとの河床が高く涸れて、あらぬ處に濁流の漲るのが常であつて、飛鳥川の淵瀬は古來變り易きものとせられてゐたのである。香具山の麓に海原の如き埴

安の池のできたのも、それは多武峰から流れ落ちる倉梯川のいたづらであつたであらう。

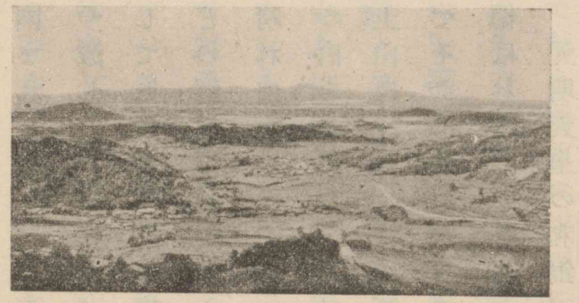
飛鳥川の東に天の香具山・耳成山、西に畝傍山があつて鼎立してゐる。いづれも平野の中に孤立した美しい小山である。畝傍山はやゝ形が鋭い。その附近は昔から森林であつたと思はれる。耳成山は形がなだらかである。古來梔子の樹を以て有名であるが、今も猶存してゐる。天の香具山はその背後に高い山を控へてゐるので、やゝ目立たな



根こじ
齋瓮

い。併し、古代から最も人事と交渉の多い山で、神事にはこの山の眞榊を根こじにし、又、この山の土を取つて齋瓮を作つたのである。

この三山の地が古代文化の中心地であつた。更に東方には三輪山から續いて、泊瀬の山々が聳え、南には多武・高取の山、西方には葛城の連嶺が雲を凌いで、大和川を隔てて北方の生駒山脈に連なつてゐる。また、多武・高取の彼方には吉野川を隔てて吉野の群山がそゝり立つてゐる。たゞ北方のみはやゝ開けて奈良・郡山の平原を控へてゐるが、それもその末



大和三山の遠望

二上山
今は「にじやうざん」と呼ぶ。

元明天皇
第四十三代、御名阿閉皇女、天智天皇の皇女、養老五年(一三八一)崩御、御年六十一。

和銅三年
紀元一三七〇年。

七代
元明・元正・聖武・孝謙・淳仁・稱德・光仁の七天皇の御代。

は奈良山が霞をひいて遮つてゐる。かやうに、四方山を以て圍まれた土地であるから、氣候は溫和であるが、寒暑の差はやや激しい。昨日まで青葉に茂つてゐた山も、一夜の雨に黃葉してしまふやうに感じられることも少くない。併し、京都ほどの氣象の激變はなく、雨量は少く、風もさして烈しくはない。晴れて雲の退くまゝに仰ぎ見れば、遙なる吉野山に今朝は雪の白きを見る。月は卷向の弓月が嶽より出でて、玉くしげ二上山に沈む。この平和の鄕に古聖帝は皇居を奠められたので、そこに住む人々の溫和な心は、そのかみの埴輪の目・鼻にも偲ばれるのである。

元明天皇の和銅三年、天皇は都を最北の奈良平原に遷して、こゝに平城宮を造營せられた。爾來七代七十餘年の間、この

古事記
一〇八頁參照。

日本書紀
一一〇頁參照。

懷風藻
一卷、天智天皇の朝より奈良朝に至る六十四人の詩一二〇篇を集めた我が國最古の漢詩集、天平勝寶三年(一四二)成る。

律令云々
天武天皇の定め給うた所に基づいて、大寶元年(一三六)に大寶律令を定められ、養老二年(一三七八)に之を修正した。

恭仁
相樂郡加茂に近い地。天平十二年(一四〇)聖武天皇、こゝに都を遷し給うた。

難波
天平十六年(一四〇四)聖武天皇こゝに都を遷し給うた。

地は帝都として榮えたのである。この南方は大和川を隔てて飛鳥・藤原の平野に接し、東には春日山・高圓山があり、佐保川はその溪谷の水を併せて、南流して大和川に注ぐ。北は奈良山を隔てて山城の國に接し、西は生駒の山脈を以て河內國に隣してゐる。その氣象や風光は三山の地と大差はないが、時の人は山遠き都と稱して、天空の開濶を喜んだのである。ももしきの大宮人は佐保の內に邸宅を連ねて、馬醉木散る高圓の野邊に遊び、大君の三笠の山の親しき姿を仰ぎ見つゝ、ひたすら唐代の文物の移入に努めた。この間に古事記・日本書紀は成り、懷風藻は編せられ、律令は再び改修せられた。萬葉集の前身である多くの家集も、恐らくはこの時代の前半に成つたのであらう。時に都を山近き恭仁の宮、難波の京に移した

青丹よし云々
一二八頁參照。

ふりにし里
鶏鳴く古りにし里の秋萩を思ふ人ども相見つるかも。
（萬葉集、卷八）

遠白し
瀧つ河内
……吉野川瀧つ河内に高殿を高しりまして……
（萬葉集、卷一）
離宮は吉野郡宮瀧の地にあつた。

巨勢の野
奈良縣南葛城郡葛村古瀬、和歌山線吉野口驛に近い。

眞土山
大和國（奈良縣）より紀伊國（和歌山縣）へ越える山、この山を越えた所が和歌山縣伊都郡隅田村待乳である。

こともあつたけれども、それも一時で、またもとの平城の京に還つた。時代はもう都を遷すには餘りに面倒な事情を伴なふやうになつてゐたのであらう。

青丹よし奈良の都は咲く花の薫ふが如しと歌はれてゐる。香具山のふりにし里は鶏鳴く里と荒れたけれども、夏草の茂みを分けて草深百合の花を尋ぬる人もあらう。それより高取の山を越ゆれば、山峽の間を流れて吉野川は遠白く西に走る。後の吉野朝の花は山上であるが、萬葉人の遊んだところは川の畔であつた。鮎子さばしる瀧つ河内に離宮を建てて行幸せられたのは隨分昔からのことで、天武・持統以後も屢この宮に行幸せられた。

萬葉集頃の人々の通路は、葛城山の麓なる巨勢の野を通つ

和歌の浦
和歌山縣海南市の海岸一帶の地、和歌山市より南八粁、聖武天皇行幸し給ひ、明の浦と命名し給うたが、後に若浦・和歌の浦といふ、歌枕。

龍田の神
龍田神社を申す。奈良縣生駒郡三郷村に鎮座、官幣大社、祭神は風の神。

住吉の神
住吉神社を申す、大阪市住吉區に鎮座、官幣大社、祭神は住吉の神と神功皇后。

眞楫しじぬき
……難波潟御津の崎より大船に眞楫しじぬき白浪の高き荒海を……
（萬葉集、卷八）

泉川
今の木津川のこと。

大君の
荒野らに里はあれども大君のしきます時は都となりぬ。（萬葉集、卷六）

て吉野川の溪谷に出た。それより下り、眞土の山を越えて紀伊の和歌の浦へも出た。難波への往還は、奈良からは生駒山脈を越えた。峰の上に匂へる花を仰ぎ見つゝ、風な吹きそと龍田の神に言擧げして峠に出れば、かゞやく難波の海は眼の前に廣げられて、遣唐の船舶も、その岸の住吉の神を祈つて眞楫しゞぬき漕ぎわかれたのである。奈良より北へ奈良坂を越えれば、泉川の清流は鹿背山の間を流れて來る。ささなみの近江の國へはこれから通ずるので、北國への旅には必ず越えねばならぬ峠であつた。

大君のまします時は卽ち都であるが、天皇の御心が一旦その地を離れて北へ奈良坂を越え給へば、さしもとことはにと思ひ定めて造られた奈良の都も、いつしか衰へて僅かにその

興福寺
法相宗大本山、藤原鎌足の創建、藤原氏の氏寺としてその氏神春日神社をも管轄し、久しく盛大を極めた。

立ちかはり云々
田邊福麿、萬葉集卷六。

儼と
上代日本文學史
武田祐吉著、舊著「上代國文學の研究」(大正十年三月刊行)に改修增補を加へ構成を新にしたもの、上代日本文學の史的研究、昭和五年(一九三〇)十月刊行。

東部のみが興福寺の勢力の下に殘つた。これが現在の奈良市である。

立ちかはり古き都となりぬれば道の芝草長く生ひにけり

これは天平の中ごろに、都を一時奈良から山城の恭仁に移した當時の作である。今の奈良に旅する人は麥圃の間にそのかみの平城宮の大極殿の礎石の遺跡を見て、また同じ感慨に浸るであらう。併し、工作物は亡びても、いにしへ人の生活の蹤は儼として今も殘つてゐる。古人の殘した文藝の力はたやすく吾人の心の上に古人の心を呼起さしめる。文化の故郷を偲び、祖先の心情を懷かしむ者に取つては、大和の國の一草一石も意味ある存在である。

(上代日本文學史)

稻羽
因幡國、鳥取縣の東半。

大穴牟遲神
書紀には大己貴、萬葉集では大汝と書す、大國主命の御事である。

氣多の前
因幡國氣多郡附近に白兎神社がある。

一四 上代文學抄

稻羽の素兎

大國主神の兄弟八十神ましき。共に稻羽に行きける時に、大穴牟遲神に帒を負せ、從者として率て往きき。是に氣多の前に到りける時に、裸なる兎伏せり。爾に八十神その兎に謂ひけらく、

「汝爲むは、この海鹽を浴み、風の吹くに當りて高山の尾上に伏せれ。」

といふ。かれ、その兎八十神の教ふるまゝにして伏しき。爾にその鹽の乾くまに〳〵、その身の皮悉に風に吹拆かえしか

僕（あれ）
游岐島　隱岐島。
ほりつれども
海の鰐　鰐鮫のことか、鱶の一種である。

らに、痛みて泣伏せれば、最後（いやはて）に來ませる大穴牟遲神、その菟を見て、

「なぞも汝泣伏せる。」

ととひたまふに、菟申（まを）さく、

『僕（あれ）游岐（ゆき）の島にありて、此の國に度（わた）らまくほりつれども、度らむ因（よし）なかりし故に、海の鰐を欺きて言ひけらく、『吾汝（あれまし）と族（ともがら）の多き少きを競べてむ。かれ、汝はその族のありの悉率て來て、此の島より氣多の前まで、みな列（な）み伏し度れ。吾（あれ）その上を蹈みて走りつゝ讀み度らむ。是に我が族と孰れ多きといふことを知らむ。』かく言ひしかば欺かえて列み伏せりし時に、吾その上を蹈みて讀み度り來て、今地（つち）に下りむとする時に、吾『汝は我に欺かえつ。』と言ひ竟れば、即ち最端（いやはし）に伏せ

水門
蒲の黃

輾い（輾ゆ）

古事記
三卷、神代から推古天皇の御代までのことを記した我が國最古の史書。太安萬侶詔を奉じ、元明天皇の和銅五年（一七二）稗田阿禮の誦した舊事實を基として撰した。

る鰐我を捕へて、悉に我が衣服を剝ぎき。これに因りて泣患ひしかば、先立ちて行でましし八十神の命もちて、『海鹽を浴みて、風に當りて伏せれ。』と誨（おし）へたまひき。かれ、教のごとせしかば、我が身悉に傷（そこな）はえつ。」

とまをす。こゝに大穴牟遲神、その菟に教へたまはく、

「今急（と）くこの水門（みなと）に往きて、水もて汝（な）が身を洗ひて、即ちその水門の蒲の黃（はな）を取りて、敷散らして、その上に輾（こ）い轉（まろ）びてば、汝が身本の膚のごと、必ず差（い）えなむものぞ。」

と教へたまひき。かれ、教のごとせしかば、その身本のごとくになりき。これ稻羽の素菟（しろ）といふものなり。今に菟神となもいふ。

（古事記上卷）

千葉葛野　現京都市右京區、桂川に沿うた平野。

百千足る家庭　國の秀　雄略天皇　第二十一代、御名大長谷若建命、御允恭天皇の皇子、御在位二十三年にて紀元二三九年崩御、御年六十二。

籠國の泊瀬の山　奈良縣磯城郡泊瀬町の後方に聳える山。

紀　日本書紀の略稱、日本書紀、三十卷、六國史の一、神代から持統天皇まで記述し、書、元正の事蹟を編年體に記した。天皇の養老四年（二三〇）詔を奉じて舍人親王・太安萬侶等によつて撰進せられた。

倭建命御歌一首

八雲さす出雲建が佩ける劔黑葛さは纏きさ身無しにあはれ　（古事記）

應神天皇御製一首

千葉の葛野を見れば百千足る家庭も見ゆ國の秀も見ゆ　（同右）

雄略天皇御製一首

籠國の泊瀬の山は出立の宜しき山走出の宜しき山の籠國の泊瀬の山は文に麗し文に麗し　（雄略紀）

岩の上に小猿米燒く米だにも手揚て通らせ山羊の小父　（皇極紀）

橘は己が枝々實れれども玉に貫くとき同じ緒に貫く　（天智紀）

大殿祭　祝言を奏して宮殿の安泰を祈る祭、恒例としては新嘗祭・大嘗祭等の前後に行はれ、臨時としては皇居の遷移・齋宮の卜定の後などに行はれる。

言壽ぐ

言寄さす

言止む

食す

齋斧

天の御翳

大殿祭

高天原に神留ります皇親神魯企神魯美の命以て、皇御孫の命を天津高御座に坐せて、天津璽の鏡劔を捧げ持ち賜ひて、言壽ぎ宣り賜ひしく、皇我宇都御子皇御孫之命、此の天津高御座に坐して、天津日嗣を、萬千秋の長秋に、大八洲豐葦原瑞穗國を安國と平けく知しめせと言寄さし奉り賜ひて、天津御量以て、事問ひし磐根木根立ち、草の片葉をも言止めて、天降り賜ひし食國天の下と、天津日嗣知しめす皇御孫之命の御殿を、今奥山の大峽小峽に立てる木を、齋部の齋斧を以て伐採りて、本末をば山の神に祭りて、中間を持出て來て、齋鉏を以て齋柱立てて、皇御孫之命の天の御翳日の御翳と、造り仕へ奉れる瑞の御殿

天のちだり
錯ひ
よめのいすゝき
いつつし

堅磐に
幸ふ
淨まはる
和幣

を、汝屋船命に天津奇護言を以て、言壽ぎ鎭め白さく、此の敷きます大宮地は底津岩根の極み、下津綱根昆虫の禍なく、高天原は青雲の靄く極み、天のちだり飛鳥の禍なく、掘堅めたる柱・桁・梁・戸・牖の錯ひ動き鳴る事無く、引結べる葛目の緩び、取葺ける草の噪ぎ無く、御床津比のさやぎ、よめのいすゝき、いつつしきことなく、平けく安らけく護ひ奉る神の御名を白さく、屋船久久遲命、屋船豐受姫命と御名をば稱へ奉りて、皇御孫之命の御世を堅磐に常磐に護ひ奉り、五十橿御世の足御世に手長の御世と幸へ奉るによりて、齋玉作等が持齋はり持淨まはり造り仕へ奉れる瑞の八尺瓊の御吹ぎの五百都御統の玉に、明和幣・曜和幣を附けて、齋部の宿禰某が弱肩に太襁取懸けて、言壽ぎ鎭め奉る事の漏落ちむ事をば、神直日命・大直日命聞直し見直

延喜式
五十卷、弘仁式と貞觀式との後を承けて、貞觀十一年（二五九）より延喜七年（二五七）までの儀式を記した書で、藤原忠平等が勅を奉じて延長五年（二五七）に撰進したもの、卷第八は祝詞を收載する。

たくぶすま
きだ
はたすゝき
しもつづら
もそろもそろに
打絕
加志

して、平けく安らけく知しめせと白す。

（延喜式）

國引

意宇と號くる所以は、國引きませる八束水臣津野命の詔りたまはく、八雲立つ出雲國は、狹布之稚國なるかも、初國小さく作らせり、かれ作り縫はむと詔り給ひて、たくぶすま新羅のみ崎を國の餘ありやと見れば、國の餘ありと詔りたまひて、童女の胸鉏取らして、大魚のきだ衝別けて、はたすすきほふり分けて、三よりの綱うちかけて、しもつづらくるやくるやに、河船のもそろもそろに、國來國來と引來縫へる國は、去豆の打絕よりして、八穗爾杵築のみ崎なり。かくて堅め立てし加志は、石見國と出雲國との堺なる、名は佐比賣山是なり。又持引ける綱

は薗の長濱これなり。

又、北門佐伎の國を國の餘ありやと見れば、國の餘ありと詔り給ひて、童女の胸鉏取らして、大魚のきだ衝別けて、はたすすきほふり分けて、三より綱うちかけて、しもつづらくるやくるやに、河船のもそろもそろに、國來國來と引來縫へる國は、多久の打絶よりして、狹田の國是なり。

又、北門良浪の國を國の餘ありやと見れば、國の餘ありと詔り給ひて、童女の胸鉏取らして、大魚のきだ衝別けて、はたすすきほふり分けて、三よりの綱うちかけて、しもつづらくるやくるやに、河船のもそろもそろに、國來國來と引來縫へる國は、手縫の打絶よりして、闇見の國是なり。

又、高志の都々のみ崎を國の餘ありやと見れば國の餘あり

出雲國風土記
元明天皇の和銅六年（一三三）諸國に勅して作らせられた風土記の一で、出雲國（島根縣の東半）九郡の物産・地勢・名稱等の由來・傳說等を述べた書、天平五年（一三九三）成立。

と詔り給ひて、童女の胸鉏取らして、大魚のきだ衝別けて、はたすすきほふり分けて、三よりの綱うちかけて、しもつづらくるやくるやに、河船のもそろもそろに、國來國來と引來縫へる國は、三穗の崎なり。持引く綱は夜見島是なり。堅め立てし加志は伯耆國なる大神岳是なり。

今は國引き訖へぬと詔り給ひて、意宇の杜に御杖衝立てて、意惠と詔り給ひき。かれ意宇といふ。

（出雲國風土記）

北原白秋
名は隆吉、福岡縣の人、詩人、歌人、明治十八年（一八八五）生。

言問ふ

一五 言問

北原白秋

岩が根に言問はむ、
いにしへもかかりしやと。
苔水のしみいづる
かそけさ、このしたたり。

草に木に言問はむ、
いにしへもかかりしやと。
おのづから沁みいづる
わびしさ、このあかるさ。

わりなさ

海豹と雲
「水蠟集」以後八年間の著者の詩作を集む、昭和四年（一九二九）八月刊行。

小さき日に言問はむ、
いにしへもかかりしやと。
かがやきの空わたる
わりなさ、このはるけさ。

神神に言問はむ、
いにしへもかかりしやと。
はればれとひびき合ふ
松かぜ、このさわさわ。

（海豹と雲）

窪田空穗
名は通治、長野縣の人、歌人、早稲田大學教授、明治十年(一八七七)生。
分家
郷里
長野縣松本市在。

衝動

一六 母の寫眞

窪田空穗

八月の一日は、私にとつては母の日である。私は家を持つてはゐるが、分家で、本家は郷里にあるので、其の日には、本家では、家としてのやゝ改つた行事の一つとして、神事を行つてゐることと思つてゐる。母に對する禮としては、私は何もする必要はないのであるが、心としては年々聊かの馳走を拵へさせ、第一に母に、と思つて神棚に供へさせ、同じ物を家族の者と一緒に、其の前で食べる事にしてゐる。もの足らぬ事には、私の家族は、母の亡くなつた後に出來たものばかりで、そこにゐる誰も、母の顏を見た者は無い。母を憶ふと、私には母は懷かしさその物となつて、胸に餘つて來て、それを言葉にしたい衝

附錄

動を感じるのであるが、この懷かしさだけは全く言葉にはなし難い。それ程の懷かしさではあるが、年の隔りから、淡い、澄んだ物となつてしまつてゐて、相手は十分物ごゝろの附いてゐる我が子供ではあるが、それを適當に傳へようとすると、全く手のつけられない感がする。「お祖母さんが生きてゐて、お前たちを見ると、それはかはいがつてくれるよ。」私は何時の時かそんなことをいつて、子供の顏を見廻したことがあつたが、私を見返す子供の笑顏は、何の内容もない空虛なものであることが感じられて、却つてつまらない氣のしたことがあつた。この日を、今少し力のあるものとしたいと思ふところから、私は別な一つの意味を附加へた。それは、長男の誕生日が、都合よくも、同じく八月の一日なので、それを附錄として、多少の現

實味を添へる事にしたのである。

今年もその八月の一日が近づいて來た。この春以來、私の家は災難が續いてゐる。二月から三月に亙つて全一月間、私は床から出られない病氣をした。長男が、これは私よりも重く、一時はどうかと危ぶまれた大病をした。

八月一日、母の死んだ日も、ちやうどこんなに暑かつたと思ふ日、私は何かめじるしのあつた方がと思つて、平生は書齋に飾つてある兩親の寫眞を、神棚に移して、新しい花を供へ、水を供へ、菓子・果物などを供へて、そこに今夜の馳走を供へるべき場所を設けなどした。

見馴れてゐる寫眞ではあるが、處を變へると新なる感あるものとなつた。

明治二十七年
紀元二五五四年。

此の寫眞の裏には、それを寫した時が、私の手で記してある。それは、明治二十七年の四月である。その時母は五十七歳、父は五十九歳であつた。十八歳であつた私は、この寫眞を寫した時の事を覺えてゐる。

當時の農村では、寫眞を寫すといふことは、やゝ特殊なこととなつてゐた。父の寫眞は、懇意な人と連寫したものがあつたが、獨りきりのものはなかつた。母のものも、下の姉と寫したものはあつたが、同じく獨りきりのものは無かつた。その時、父の發意で、子供の爲に寫眞を殘して置かうといふことになり、母を連れて二里足らずもある松本まで、わざ〳〵此の寫眞を寫しに行つたのであつた。母が寫す時に、瞬きをしたといふので、父から「婆さ、お前の寫眞は、盲に寫つてゐるかも知れ、

ねえぜ。」といはれたといつて、母は氣にしてゐたことを覺えてゐる。　出來てきた寫眞を見ると、母は眼を開いてゐて、平生に少しもちがはない眞面目な顏をしてゐた。　父ののは、やゝ笑顏になつて、平生の威嚴が薄れてゐて、却つて變なくらゐであつた。　枚數は四枚で、四人の子供に一枚づつ與へるやうになつてゐて、餘分のないやうにしてあつた。　今、神棚にある寫眞は、その四枚の一枚づつである。　私にとつては、大事な寫眞であるが、四十一年間といふ歲月は、その寫眞を變色させて、出來て來た當時の記憶にあるものに較べると、薄れて、おぼろげになりかゝつて、見るからにさみしさの漂つた物となつてしまつてゐる。

招んだ客は何れも待たせずに來た。

案じる

次男に伴なはれて來た姉は、丁寧に白紙に包んだ薄い小型な物を私に手渡しにした。　何か贈物であらうと心得て、請取つて、手にしてゐると、姉は眼で、見てくれと言つた。

開いて見ると、それは母の寫眞で、唯一枚だけのものであつた。　そして、それは私の家にあるものとはちがつて、眞新しい、出來てきた時にさながらの物であつた。

その寫眞のその狀態は、同じ家に生まれた弟の私には、一目にその經歷が案じられた。

四人の子供に一枚づつといふ親の心の籠つた寫眞は、母の時には、その心通りに、形見に添へて姉の嫁した家へ屆けられたものと見える。　しかし、母より一年後れて死んだ父の寫眞は、屆けられずにしまつたのである。　多分姉は、母の寫眞を貰

つたが、それがどういふ心のものであるとも知らず、又父の寫眞の貰へないのは、貰ふことの出來ないものと諦めて、口にも出さずに過してしまつた事と思はれる。

又、この、私の家の物と同じ寫眞の眞新しさは、貰ふには貰つたが、嫁した家の周圍は、母とは直接の繫がりの無い者ばかりなので、それらの人に對する遠慮から、恐らくは箪笥の底に藏つたぎりで、この永い年月の間を、日の目も見せずにあつた爲と思はれる。

その姉が東京の次男の許に來る時には、此の寫眞を、僅かの手荷物の中に入れて持つて來てゐるのである。長男の死んだ後にも、さすがにその家の先祖の位牌を据ゑて置く家はあつて、夫の位牌も、長男の位牌も、先祖のものと共に据ゑてある

のであるが、この寫眞は、それらとは一緒に置かず、身に着けて、東京へ持つて來たのである。

姉は言葉少なに、私の家へ持つて來た心を言つた。

「あの家へ置くと、箱の底に入れたきりになつてしまふからね。此家だと、飾つて置いて貰へると思つたから。」

七十歳になつた姉は、默つてはゐるが、いつどうなるかわからないといふ心を持つてゐよう。賴みぬいてゐる次男ではあるが、その家に置くよりも、私に託して置く方が、幾らかましだと思ふのであらう。

その私の家はどうであらう。私は今日の命日を、或は今日だけではないかと思つてゐる。私の子供はといへば、私の母に交渉の少い上からは、この姉の次男や、或は横濱にゐて、今日

の命日を濟ませばそこへ行かうといふ三男やよりも一層ではないか。何の賴りにならう。

姉は、それ以上は何もいはなかつた。私も自分の心持は、全く封じてしまつて、姉には聊かもいはなかつた。

命日の濟んだ後、姉は二三日逗留してゐた。姉と私とは打續く暑さに佗びて、それ〳〵身のまはりに枕を置いて、茶をいれかへては飲み〳〵したが、母の寫眞の事は、双方とも再び口にはしなかつた。

（空穗隨筆）

空穗隨筆
窪田空穗著、昭和八年刊行の「歌話と隨筆」以後の隨筆集、昭和十一年（一九三六）十一月刊行。

穗積重遠
東京市の人、法律學者、法學博士、男爵、東京帝國大學教授、明治十六年（一八八三）生。

土肥慶藏
福井縣の人、醫學者、醫學博士、東京帝國大學名譽教授、昭和六年（一九三一）歿、年六十六。

一七　婦人の內助

穗積重遠

婦人の努むべきことは何であるか。一口にいへば、それは內助である。家庭に於てはその內部を整頓するのが婦人の務であり、國家に於ても、その內容を充實させるのが婦人の働である。これは婦人に最も適した、而して、婦人でなければできぬ仕事である。婦人が各種の職業に就き、今まで男子の職業になつてゐた仕事が、段々婦人に開放されることは結構であるが、一般の婦人の天分たる仕事としては、この內助を措いて外にないと考へる。

それについて思ひ起すのは、先頃亡くなられた土肥慶藏先生の事である。先生は、唯醫學博士として偉かつたばかりで

壽像除幕式

發起人

ゾルフ博士 名はヴィルヘルム、獨逸人、言語學者、政治家、西暦一九三一三六駐日大使、（西暦一八六二生）。

なく、人格は固より、文學方面の見識に於ても實に立派な方であつたが、還暦の御祝の時に、先生の德を慕つてゐる人達が、先生の壽像を作つて、それを博士邸の庭に建てた。その除幕式に私も參列したが、その胸像の下に先生と奥樣が並んで立つて居られる、その前へ發起人總代を初として、參列の名士が、かはるがはる出て祝辭を述べ、土肥先生の功績を稱へる演說をされた。私は、それを聽いて、今更ながら偉い先生だと感じたのであるが、演說者が、皆先生のみを褒稱へて、目の前に並んで立つて居られる奥樣の事を少しもいはない。この次の人がいふだらうと思つてゐても誰もいはない。私は何となく物足らぬ氣持がしてゐた。ところが、最後に立つたのが當時の駐日ドイツ大使ゾルフ博士であつた。博士は非常な雄辯家

業績

絶大

溜飲が下る

である。ドイツ語演說であつたが、實に立派な祝辭であつた。ゾルフ博士は、他の人々と同じく、先づ土肥博士の業績を十分に賞揚したが、更に言葉を改めて、土肥博士が斯く學德共に大成されたのは、博士の人格と努力とによる事勿論だが、併し、それは博士一人の力ではない、博士夫人の内助によつてである、我輩はこゝに博士夫人に絶大の敬意を表する、斯う述べたのである。私は、その一言を聽いて、先刻から胸に溜めてゐた溜飲が一度に下つたやうな氣持がした。殊に私が面白く思つたのは、ドイツ語演說中にゾルフ博士が特に「ナイジョ」と日本語を挿んだことである。多分この内助といふ言葉にちやんと當る外國語がないのであらう。勿論西洋婦人も内助をする。併し、内助は日本婦人の特長たる美德である。土肥博士

指摘する

夫人がその好典型であるのを、却つて日本人が氣がつかず、外國人たるゾルフ大使に指摘されたのである。誠に内助は日本婦人の特長である。私はこの特長が益發揮されんことを切望する。而して、私がそれをいふのは、必ずしも今まで世間でいはれたのと同じ意味ではない。もつと強い意味である。普通一般の考へ方では、婦人自身も内助といふことを單に家庭内の手傳仕事に過ぎぬやうに思ひ、その眞價値を十分に自覺自重してゐない。而して、男子は又、婦人の内助につき十分な感謝と尊敬とを拂つてゐない。私はそれを豫々遺憾に思つてゐた。然るに、ゾルフ大使は、内助が婦人の本分であり、成功が夫妻協力の結果なることを明言したのであつて、私がそれを聽いて溜飲が下つたのは、その日その席の溜飲が下つた

片棒をかつぐ

だけではないのである。

内助は確に家庭の仕事である。併しながら、同時に、國家の仕事であり、社會の仕事なのである。我々男子は、從來偉さうに、國家・社會の事を男だけの力でやつてゐる樣に思つてゐたが、それは大變な間違で、國家・社會は男と女とで組立ててゐるのである。男女で片棒づつかついでゐるのであつて、男だけで背負つてゐる國家でもなければ、女だけで背負つてゐる社會でもない。それ故、婦人が更に一層自覺して、内助なることが頗る大切な仕事であるといふことを考へねばならぬと同時に、又、男子は婦人の内助が如何に有力であるかを考へ、婦人内助の力によつて我々はこの日本を背負つて立つことができるのである事を、十分に認識し、尊敬し、且、感謝せねばならぬ

殺風景

と思ふ。然らば、今日日本婦人のなすべき内助の仕事は何か。先づ以て家庭の美化・淨化である。今日の世の中は實に殺風景である。毎日の新聞を見ても、いやな事ばかり目につく。家庭にも種々の悲劇があり、社會には忌まはしい事件が續出する。何とかして世の中をこの殺風景から救ひ、この醜い世の中を本當の人の世らしい美しい世の中にしたいと思ふ。而して、人生美化・淨化の一番の適任者は婦人である。今日のこの殺風景を救ふものは、日本婦人が古來もち傳へたる優雅の婦德より外はないのである。

日本は元來極めて優美な國だつた筈である。然るに、だんだん進歩發展するにつれて、人間の心の美しさが次第に喪はれて行くやうに思はれるのは、誠に遺憾な次第である。人或

はこれを物質文明の弊といふ。私はさういひたくない。精神文明が物質文明に伴なはぬ弊といひたい。人間がこゝまで進んで來たのは物質文明のお蔭である。この驚歎すべき物質文明を逆戻りさすべきではない。益、進展せしむべきである。物質文明も亦人間の驚くべき精神力の發現である。その精神力を更に一層精神文明の方に働かせ、精神文明が物質文明に並行するのみならず、それを指導するやうにありたいと思ふ。必ずしも、物質文明が男の仕事で、精神文明が女の仕事だとはいはない。併し、精神文明の振興は婦人に最も適する仕事であるから、婦人は主としてこの方面に力を注がれたい。即ち、私が特に日本婦人に期待するのは、婦人の美德による國家・社會の淨化・美化である。而して、家庭が集つて國家・

社會を成すのであるから、國家・社會を淨化し美化せんには、先づ家庭を淨化し美化せねばならぬ。

我が國の家庭は昔から美しいものであつた。萬葉集に、

憶良らは今はまからむ子泣くらむそのかの母も吾を待つらむぞ

といふ山上憶良の歌がある。私の妻と直接にいはずに子供のお母さんと呼んだ所に、我が國の家庭の親しみがあらはれてゐる。日本の家庭では、夫が外で一日働き「吾を待つらむぞ」と急いで歸つて來ると、家事にいそしんでゐた妻がきげんのよい子供の手をひいて笑顏で出迎へる。この日本婦人の内助、これが決して輕いことではないのであつて、これあるが故に我が國は永久であり盛大であるのだと思ふ。

憶良らは云々
萬葉集卷三に見えてゐる山上臣憶良罷宴歌一首と題した歌。

萬葉集の中に今一つ夫婦の情愛をよんだ大變よい歌がある。讀人不知で、歌の内容から見ても身分の低い人の歌と思ふが、夫婦が歌で問答してゐるのであつて、先づ妻が夫に長歌で、

つぎねふ　山城道を　他夫の　馬より行くに　己夫し
歩より行けば　見る毎に　音のみし泣かゆ　そこ思ふに
心し痛し　たらちねの　母が形見と　あが持てる　まそ
み鏡に　蜻蛉領巾　負ひなみ持ちて　馬買へわが背

とよみかけてゐる。山越えの道を、よその夫は馬に乘つて行くのに、うちの夫は歩いて行くので、見てゐる妻の身として、聲を上げて泣きたくなる、思つただけでも胸が痛い。どうかして馬に乘せて上げたいと思ふけれども、家貧にして何の貯も

つぎねふの歌
八六頁參照。

山内一豐
豐臣時代の武將、信長・秀吉・家康の臣、土佐に封ぜらる、慶長十年(三六三)卒、年六十一。
山内一豐の妻
近江淺井の臣、若宮友興の女、元和三年(三七七)歿、年六十一。
專賣特許

ない。何をがなと考へたところ、こゝに一面の鏡がある。當時としては貴重品、況や鏡は女の魂であり、更にその上母親の遺物といふのだから、自分に取つては命から二番目の大切な品であるが、これを提供しませう。それでも足りぬかも知れないから、私の大事な蜻蛉の羽根のやうに透いたこの肩掛も差出しませう。この二品を取揃へて持つて行つてそれで馬をお買ひなさい、我が夫よ、といふのである。實に眞情の籠つたよい歌であつて、日本の妻が己を空しくして夫を思ふ貞節は昔からこの通りだつたのである。山内一豐夫人の話は有名であり、貞女の鑑とされてゐるが、しかし、それは一豐夫人の專賣特許ではない。千年の昔既に立派な先例があつたのである。而して、一豐夫人の場合には一豐は夫人が鏡の函から

よしゑやし

秀逸

出した金で馬を買つたのであつて、これ亦妻の折角の志を無にしないことで結構だが、萬葉集の夫は妻の差出した鏡と肩掛を受けなかつた。

馬買はばいもかちならんよしゑやし石は踏むともあ
はふたり行かむ

といふ短歌で斷つた。そなたの志は嬉しいが、私ばかり馬に乘つてそなたを歩かせる譯には行かぬ、えいまゝよ、馬を買ふことはやめにしよう、たとひ嶮しい石道を踏むとも、我々二人は手に手を取つて一所に歩いて行かうぞ、といふのである。

これ亦歌として秀逸であるのみならず、自分さへよければといふ我儘を捨てて、夫婦同體の實意を示したところ、誠に奥ゆかしい限である。私は日本婦人が萬葉集以來引續きかの

行路難

妻と同じ氣持であることを疑はぬが、更に日本の男たちに萬葉集の夫の歌をよく味はつて貰ひたい。

扨て、私は右の歌の「石は踏むとも」の一句を殊に意味深く思ふ。人生行路難、どの樣な困難が起るかわからぬが、夫婦相倚り相扶けて如何なる困難をも踏越えて行かう、といふのであつて、實に賴しい立派な覺悟である。而して、私はこの夫の歌の下の句を、單に夫婦の間のみならず、國民一般に當てはめたいと思ふ。即ち、我が國今日の非常時に處し國難を打開する爲には、國民全體が一致團結し、「石は踏むとも」九千萬人「共に行かむ」の覺悟を以て進む外ないのである。九千萬人の一半は男子であり、一半は婦人である。萬葉の夫婦が各己を空しくして相提携した如く、國民全體としても男子と婦人とがそれ

ぞれその本分を全くして相扶け相伴なひ、如何なる險難をも踏破り正義を指して眞直に進みたいものである。

妻たる事と並んで大切な婦人の本分は母たる事である。婦人が母としての本分を盡くすか否かは、次の時代の人類が善くなるか惡くなるか、將來の日本が盛になるか衰へるかの岐れ目である。勿論、父親も重きをなすが、朝起きてから夜寢るまで引續き子供に接觸してゐるのは母親であるから、母親が善いか惡いかは直接に子供の善い惡いに關係する。それ故、婦人が母親としての任務の大切な事を十分に自覺せねばならぬと同時に、男子は又婦人の母親たる地位を尊重すべきである。

斯樣に妻たることと母たることが婦人の本分であつて、歷史

源頼朝
義朝の第三子、武家政治の創始者、正治元年(一八五九)薨、年五十三。
源政子
北條時政の女、嘉祿元年(一八五)薨、年六十九。
源實朝
頼朝の第二子、頼家の弟、鎌倉幕府第三代の將軍、歌人、承久元年(一八七)公曉に殺された、年二十八。
物いはぬ
詞書「悲の心を」、金槐和歌集所收。

上賢婦人・女丈夫といはれた人が同時に良妻・賢母であつた例は澤山あらうが、時には賢婦人・女丈夫にして妻とし母としては落第のものもないではない。その適例は頼朝の夫人政子である。政子は所謂尼將軍として天下の政治を左右したのであつて、賢婦人であり女丈夫であるには相違ない。しかし、家庭婦人としては果してどうであつたか。その子たる源實朝の歌に、

物いはぬ四方のけだものすらだにもあはれなるかな
や親の子を思ふ

といふのがある。言葉も解せぬ野山の獸さへも親の子を思ふ情はあれ程までに切なるものよ、といふのである。その歌の裏には次のやうな氣持が痛切深刻にあらはれてゐる。禽

いとほしや
詞書「道のほとりに幼き童の母を尋ねていたく泣くをそのあたりの人に尋ねしかば、父母なむ身まかりにしと答へ侍りしを聞きて」金槐和歌集所收。

獸でさへも親は子を思ふのに、母上はどうして我々に對して母たる愛情をもたれないのか、實に情ない悲しいことだ、といふのである。實朝は又

いとほしや見るに涙もとゞまらず親もなき子の母をたづぬる

と歌つた。誠に人生最大不幸の一つは、親なきこと、又親があつても親に愛して貰へぬことである。殊に母の愛は子に取つて何物にも替へ難く貴重である。實朝に歌はれた孤兒も「母よ、母よ。」と泣いた。實朝自身も、位人臣を極めながら、母の愛なきが故に泣いた。母の愛は實に大切である。單にその子を人とならしめる爲に大切であるのみならず、次の日本を作り上げる國家的大事業のために大切なのである。即ち、婦人

は母として先づ愛情がなければならぬ。單に賢婦人たるのみでは足りない。併し又、愛情だけではいけない。本當に物の道理がわからねばならぬ。子が少し成長すると母親は忽ちその話相手・相談相手になれなくなる。母と子が別世界に住み、子の方でもあたまから「お母さんには解らない。」ときめこんで母親に寄りつかぬやうになる。實に淋しく悲しいことではないか。故に、母親は愛情がなければならぬが、又見識がなければならぬ。子を愛するのみでは足らぬ。子に尊敬されねばならぬ。子が母を愛慕し尊敬し、心の中を打開けて相談する樣でなくてはならぬ。我が國の婦人は愛情に於ては缺ける所がない。併し、盲目の愛ではいけない。子を敬服させるに足るだけの見識を伴なつた愛情でなければ、本當に母

親として本分を全くする事ができない。それには我が國の婦人はまだ〳〵大いに修養を積まねばならぬと思ふ。今一奮發して從來の美點を益〻發揮すると同時に、その不足缺陷を遺憾なく充實されたいものである。男子も亦さらに修養を積むべきこと勿論であるが、斯くして一層完成せられたる日本男子と日本婦人とが、所謂「石は踏むとも共に行かむ」の大決心を以て、相扶け相補つて家庭を築き國家を擔ふならば、非常時何かあらん、國難何するものぞ。徒に非常時國難來を叫んで周章興奮する必要はない。たゞ男女各自その本分を盡くさんのみである。

斯くして我々は男女心を併せ、一致團結して我が日本國を守立てて行かねばならぬのであるが、もしそこに確乎たる中

心があれば、一致團結は最も力強いものになる。而して、我國民一致團結の唯一無二なる最も力強い中心點が皇室であらせられることは多言を須ひぬ。今一度實朝の歌を引けば、

山は裂け海はあせなん世なりとも君に二心わがあらめやも

我々日本國民は、平常時といはず非常時といはず、この忠誠心を以て終始すること勿論である。實朝の歌に又、

大海の磯もとゞろに寄する浪われてくだけて散るかも

といふのがある。打寄せる大波の力強さを詠ずると同時に、その怒濤が岩に當つて碎け散るその大磐石の巍然たるところを歌つたもので、正しく今日の日本の姿である。我が日本

山は裂け
詞書「太上天皇御書下預時歌」、金槐和歌集所收。

大海の
詞書「あら磯に浪のよるを見てよめる」、金槐和歌集所收。

巍然たるところ

は今や世界の大海原に大磐石の如く屹立してゐる。狂瀾怒濤が後から〳〵押寄せて來ても、碎け裂けて散つてしまふ。何とも心強い限である。併し、斯くあらんが爲には、我々が本當に心をひきしめて、強い所は強く、優しい所は優しく、男と女とがそれ〴〵その特長を發揮して、清く美しき社會を築き上げねばならぬ。而して、その根本は卽ち家庭を清く美しくする事であつて、その大責任は婦人にかゝつてゐるのである。

（大阪朝日新聞）

狂瀾怒濤

大阪朝日新聞
昭和八年（一九三三）四月六日―同十三日に亙り掲載された「非常時日本と婦人の内助」に據る、これは講演の筆記である。

平泉澄
福井縣の人、國史學者、文學博士、東京帝國大學教授、明治二十八年（一八九五）生。

ヘラクレートス
ギリシャの哲學者、原火論者。

イオニオ
小アジアの一地方、ギリシャ移住民の住んだ所、エペソスはその一邑、エーゲ海に臨む。

一八 萬物流轉

平泉澄

「萬物流轉す。」とは、古代希臘の哲人ヘラクレートスの道破した所であるといふ。ヘラクレートスは、イオニアのエペソスに生まれたる人、その生歿年月は明らかでないが、紀元前五四四年より五四一年の間に生まれたのであらうといふ。即ち大體紀元前六世紀の末より五世紀の初へかけての人である。その著書は早く逸して、今は短き斷片百二十餘を存するに過ぎない。而して、是等の斷片の中には、不幸にして彼の有名なる「萬物流轉す。」といふ句は見出されず、それ故に、果してこれが彼の言つた所であるかどうか、今日は寧ろ疑問とされてゐるが、併し、此の萬物流轉の思想を、ヘラクレートスの根本思想と

プラトン
ギリシャの大哲學者、ソクラテスに學び、イデア（常恒不變の本質界）を說いた。（西暦前四二七—三四七）

アリストテレス
ギリシャの大哲學者、プラトンの門人、アレキサンダー大王の師傅。（西暦前三八四—三二二）

方丈記
鴨長明著、人世の無常を說き、相續く災厄を記し、自らの出家と閑居のさまをのべたもの、建暦二年（一二一二）成立。

する見解は、彼の歿後いくばくも經ずして世にいでたるプラトンやアリストテレスの記述に基づいて、早くも古典的定說となり、隨つて、今日に於ても、一般には猶この說が彼の中心思想であると考へられてゐる。所謂プラトンの記述といふのは左の一文である。

ソクラテス曰く、曾てヘラクレートスは、萬物は流轉し、一物として止るなきを說き、之を川の流に譬へて、人其の足を再び元の流にひたし難しといつた。

こゝに見る川の流の譬喩は、我等をして方丈記の劈頭の句を連想せしめる。

行く川のながれは絕えずして、しかももとの水にあらず。
よどみに浮かぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくと

治承　高倉天皇の御代（一八三九―一八四〇）。

壽永　安德天皇の御代（一八四二―一八四五）。

目擊する　平家物語　十二卷、著者未詳、平家一門の榮華と破滅とを敍した軍記物語、發端は「祇園精舍の鐘の聲、諸行無常の響あり、沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらはす。」とある。

どまることなし。世の中にある人と住家と、またかくの如し。玉敷の都の中に棟を竝べ甍を爭へる、尊き卑しき人の住居は、代々を經てつきせぬものなれど、これをまことかと尋ぬれば、昔ありし家は稀なり。或は去年破れて今年は造り、あるは大家滅びて小家となる。住む人もこれにおなじ。處もかはらず、人もおほかれど、いにしへ見し人は、二三十人が中に、僅かに一人二人なり。朝に死し、夕に生まるゝならひ、たゞ水の泡にぞ似たりける。

これは殊に治承・壽永の間、源平の盛衰忽ちにして所をかへ、これに關聯して人々の運命の目まぐるしく變轉したるを目擊したるすべての人の胸をうつた感慨であつたらう。されば

道破する　長柄　もと攝津國西成郡豐崎村大字南長柄（北長柄の地）、今大阪市東淀川區、淀川の末分かれて長柄川となり、そのの北を過ぐ、孝德天皇の大化元年（二三〇）都を難波に遷して長柄豐崎宮を經營せられた、弘仁三年（二四二）この地の邊に橋を架けたが後絶えてしまつた。

不破の關　岐阜縣不破郡關ケ原町に址がある、天武天皇の二年（二三四）こゝに關を置き、三關の一とい はれた、「人住まぬ不破の關屋の板庇あれにし後はたゞ秋の風」（藤原良經、新古今集）。

パルテノン　ギリシヤ、アテネのアクロポリス丘

る。しかもまた、方丈記といひ、平家物語といひ、ひとり現實の世相の直感よりして、此の感慨を發し來つたばかりでなく、深くその根柢に於て佛教の諸行無常の思想に培はれてゐるのである。

諸行無常の行は遷流の義であるから、諸行の一語、既に萬物流轉の深意を藏すといはなければならぬ。「萬物流轉して一物も止るなし。」これ卽ち「諸行無常」の意味する所、彼は卽ちギリシアのヘラクレートスの道破せりと傳へらるゝ所、此はまた印度の釋迦の說きたりといはるゝもの、東西所を異にし人を異にして、いふ所の何ぞそれ相似たるや。

我等は既に長柄の橋の盡きたるを見、不破の關屋の荒果てしをなげき、永遠の都羅馬の地下に埋れ、不朽の神殿パルテノ

上にある祠堂、西曆前四三八年建立、アテネの守護神アテナ・パルテノスを祀つたドオリヤ式の代表的建築、戰禍の爲大半破壞されてゐる。

鐵則

ンの荒廢に驚き、萬物流轉の說、之を希臘の哲人に聽き、諸行無常の敎、之を印度の佛陀に知つた。人生かくの如し。歷史かくの如し。靜かに人生を觀じ、歷史を思ふとき、萬物流轉の一語は、動かすべからざる鐵則として、歷史を貫通し、人生を支配せるを知るであらう。

然り、かくの如くにして我等は、先づ現代の一般的傾向を克服する事が出來るのである。現代は西洋文化全盛の時代である。科學文明全盛の時代である。明治初年以來、人は西洋の文化に驚いて、我が有する過去の傳統を惜しむ所なく地に一擲し、先を爭つて西洋文明の模倣追隨にこれつとめた。而して、之を最新にして究極のもの、最高にして唯一の道と誤認した。しかも見よ、萬物は流轉す、この西洋文化の全盛も、やが

惑溺する
粟散邊土
憫笑
心醉する
指彈する

てまたうつろひかはるべき運命を免れ得ないのである。曾て佛敎に惑溺して印度を尊重するの餘り、我が國を粟散邊土として卑しむ者のあつた事は、今之を讀む者の憫笑を買ふ所である。曾て漢學に心醉して支那を中華とたゝへ、我自ら東夷と呼ぶ者のあつた事は、後世心ある者の指彈してやまない所である。それら一時の風潮、後にはたゞ憫笑と憤激とを餘すに過ぎずとするならば、誰か知らん、今日全盛を極むる西洋文化模倣の風潮の、やがて花萎み露消ゆる時あるを。我等は曾て國史を古代・上代・中世・近世・現代の五つの時代に分かち、文化の色彩の時代々々によりて鮮に相違するを說き、古代が純、上代が美、中世が聖、近世が善、而して、現代が眞を、各その最高の價値と判じ、ひたすら之を追求し來りしを明らかにした。し

不易なる
常住なる

からば――其の美のうつろひ、其の聖の忘られ、其の義の顧みられざりしが如く、其の眞も亦やがて文化最高の價値とは考へられざる日の來るを覺悟しなければならぬ。

萬物流轉の思想は、以て一物に拘泥するの陋を脫し、一代の風潮に溺沒するの弊を免れる事が出來る。しかも若し、一切流轉して、何物も止るなしとするならば、我等は一物を否定するのみならず、萬物を否定し、一代を超越せんとして、百代を無視し、遂に一物一理の據るべきなくして、あわたゞしき變幻のうちに茫然自失するの外はない。我等若しかくの如き否定の世界をいとひ、儼然として自己を確立し、己の行くべき道を規定せんとするならば、必ずや流轉のうちに在つて不易なるもの、萬世を通じて常住なるものを求めなければならぬ。流

不拔
準則
淺近
與し易し
歸趨

轉してやまざる一切の間に、我等の最後のよりどころとなる確乎不拔の磐石は遂にないものであらうか。

この變轉窮なき世に於て、確立して曾て動搖せざるもの、我等のよりどころ、道德の準則、天地の常經は忠孝の道を措いて外にない。斯く言はば、人は此の二字、少年の日より耳に熟し目に飽くが故に、事極めて淺近にして解し易く與し易しとして、また多く意を之に用ひざるに至るであらう。あゝ、談なんぞそれ容易なる。知らずや、忠孝の道は、これ一切の學問の最後の歸趨なると共に、また一切の學問は、正にこれより出發して、其の最も險難なる道を攀ぢ、攀づること萬里、苦心慘憺、一生を費して、もとより容易に盡くすべからざるを。實に忠孝は道の窮極であり、學の發端である。道忠孝に窮るといふは、こ

こに道德千古の準則あるを示す。而して、學こゝに始るといふは、これより修練の險難に足一歩を踏出すをいふのである。よどみに浮かぶうたかたをたゞ束の間の命と看破つて、一時の幻影にあざむかれざるすら、並大抵の事ではない。まして變化改換曾てやまざる流轉のうちに、永遠不朽の道德を認むる事は、猶更容易の事ではないのに、かくして見出されたる忠孝の道は、これより漸く險難の一歩を踏出すといふのである。然らば、眞にこの道に志す者の、猛く精彩を著けて、堅固不拔、千辛萬苦を甘しとするの覺悟なかるべからざるは、もとよりいふまでもない。

（「萬物流轉」に據る）

精彩

萬物流轉

時代によつて不變なる國史の一貫性を强調せんとする基礎に立てる歴史論、昭和十一年（三五六）十一月刊行。

一九 日本文化

西田直二郎

日本歴史の總體を考ふれば、この歴史こそ、日本人の遺した最も光輝ある成跡であつて、日本人を知る最も正確なる事實である。文化の上にては、この歴史こそ一般に人間を考ふる最良の對象である。

日本文化の總體を考へて、歴史の大勢のうちに、日本の古き精神が蘇つた時代を凡そ三つ擧げることができる。一は藤原時代であり、二は德川初期であり、三は明治時代である。

藤原時代は、大化改新以後、奈良朝より盛になつた唐風文物の被覆を脱し、古き日本の心が自らを現すときであつた。而して、德川時代初期から、元祿時代頃までにかけての時代は、そ

成跡

西田直二郎

大阪市の人、史學者、文學博士、京都帝國大學教授、明治十九年（一八八六）生。

封建制度

回歸する

れに先だつ戰亂紛爭の時代の裡から目ざめ來る日本の和平を愛する心から喚起されて、古き日本の姿を求めんとした心からである。而して、明治時代の初に於ては、德川時代封建制度の長くつゞける爲に生じた固化せるものを破つて、自然の裡に古い精神を更生せしめんとしたものである。

しかし、是等の時代は、唯、古のものが回歸したのではなく、それぞれ特色ある文化をもつてゐる。そこには又、時代特有の人間觀があり、それ〳〵に人間なるものを心に描き、理想とするところの人間の描寫が他の時代とちがつたものを有してゐた。隨つて、是等時代の人間觀を見れば、日本人の人間觀の典型が、たやすく考へられよう。

藤原時代人が心に描いてゐた人間を觀る爲に、その代表作

鬱興する

朱子學
支那宋の朱熹の唱へた儒學。

御伽婢子
十三卷、淺井了意著、怪談・奇話六十餘種を收め、教訓の意を寓した假名草子、寛文六年(一六六三)三月刊行。

として源氏物語を採る事は、さ程不自然ではあるまい。之に對して德川時代初期を見る時、その時代の人間なるものについての意識は、かゝる作り物語に於てあるよりは、もつと強く、人間を意識し、人間はまさにかくあるべしとした、その時代に鬱興せる儒學に於てあると言へよう。足利時代の末葉より跡をひいてゐる、瑣末な事件を材料とせる文學的作品は極めて調子の低いものであり、人間考察には力弱いものであるが、朱子學の勃興は、人間教化の上に使命を持來り、人間の把握とも言ふべきものに於ては、力強く要求し、時代の人心の上に、與へてゐるものが多い。而して、一般に學問の研究、古代精神の理解にも、この人間把握の方法が根柢に動いてゐる。時代の文學では、御伽婢子・教訓小說等、この人間觀に追隨してゐるも

約言する
規範的

のが多い。而して、この二つの時代の人間觀をその特色の上から考へるならば、源氏物語の人間は、その物語の主人公、光源氏によつても知られる如く、人間情智の自由な行動者であり、また、そこに時代人の心が見られる。即ち、約すれば、この人間こそは五慾具備の人間である。人間的欲求は醇化せられてゐるが、猶感情の自然が流露し、古い日本人の心の醇樸をこゝに見ることのできる、矢張自然の姿の人間である。是に對して、德川時代初期の學問復興に於て現されてゐる人間は、感情の世界を固くも斥けて、人間愛慾は低き自然の心として賤しめ見んとし、その前景に來るものは意志の世界であり、理性的である。而して、かゝるものを以て人間性の本質とせんとするものである。約言すれば規範的の人間である。

類型的人間觀
存在の意義
平等論
自由民權論
フランスのルソーに始まる、國民は天の賦與せる自由を有し、各自政治に參與すべき權利を有するとの主義である。
天賦人權說
人類には平等に他に制壓せられない自由の權利が備つてゐるといふ說、第十六世紀末に一派の法學者によつて提唱せられた。
範疇

是等に對して、今、明治維新の時代に、幕府政治の永年の硬化から、生々として蘇り來つた心の裡に觀じられた人間は、そは、封建制度の類型的人間觀から脫離するものであり、即ち、人間の多種多樣性を觀ずるものである。人間の多種多樣性といふのは、人間の個々がそれ〳〵に異なるものであり、且、異なるものがそれら何れも、存在の意義を有する事を知る事である。この事は、明治初年に興れる人間の平等論がよつて立つところ、又、自由民權論を叫んだ人々にとつてもその論理の根據をなしたもの、天賦人權說の主張に於ても人權なるものの基礎をなす所である。更に、先に開國論を唱へ、總べての人間知識、人間生活に、その獨立の價値がそれ〳〵にあり、一定の範疇が最後のものでない事を考へたその精神の地盤をなしたもの

であるが、又、明治の初頭に興隆する、廣く世界に知識を求むるの希望、萬機は公論によつて決せらるべしと思念したその根柢をなすものと言へる。總べては、人間個々には、相違があり、しかも、相違には尊重すべきものの存するを覺知する事より來るものである。是等論者には、そのあるものは意識されないにしても、なほ、それは求められた人間觀であつたのである。

以上の三種の人間觀、人間探究は、各時代を異にし、甚だしく隔れる年代に於て現れてゐるが、いづれに於ても、日本人の心として、しかも、日本の古き精神の蘇る時代の上に出現してゐるものである事は、注意に値するものがある。而して、それら人間觀は、要するに、日本人の姿を求めてゐたものである。ここに日本文化の歴史の全體的な意味が考へられるのである。

（日本文化史序說）

日本文化史序說　西田直二郎著、文化史の性質と、日本文化の展開を說いたもの、昭和七年（一九三二）三月刊行。

二〇　日本精神と世界精神

藤村　作

藤村　作　福岡縣の人、國文學者、文學博士、明治八年（一八七五）生。

第二義

我々は、人間として生きると同時に、國民として生きねばならぬ事は勿論である。近時若い一部の人達の間には、我々の國民として生きることは第二義のことである、我々は人間として生きねばならぬといつてゐる。併しながら、私の信ずる所では、我々の生活の單位は國民として生きることである、人間として生きることではない。どうしてさう考へるかといふと、世界には多くの民族がある。それ等の民族は特殊な血を傳へ、特殊な靈を傳へたものである。我々日本人はその中の一つである所の日本民族に屬する。我々が人間であり得るのは、日本民族であり得ることを通してでなければならな

い。日本民族でなくしてはどうしても人間たり得ることは出來ないのである。

我々の肉體は日本民族の祖先から傳へられた肉體であり、我々の靈魂は日本民族の祖先から分派し來つたものである。さうして、肉體に於ても、靈魂に於てもあらゆる世界の他の人類から違ふ所の特徴を有して、この特徴を持つことに依つて、世界のあらゆる他の民族から特殊である。この二つの特徴を持つてゐるので、我々は何としても他の民族となることを得ないのである。

この同一祖先から傳へた肉體・靈魂の特徴を共通に持つてゐる我々日本民族が、團體的結合をなして、その特徴に依つて特殊な發展をなすことに努力するのは、如何にも自然なこと

擴充する

失墜する

である。さうして、かういふ團結ほど世に鞏固な國家團結はない筈である。かういふ我が國の持つ特殊な血族的國家團體は、單に主權・人民・國土を三要素として成立してゐる國家とは違ふ。

我々が日本國民として世界に生きる意義・使命は、他の民族の持たない特殊な國民性・國民精神を持つて生きるといふ所にあらう。これを發展させ、又、これを世界に擴充する所にあらう。我々日本人の最も長じてゐる特徴の上に創造された文化を、世界に擴げることに依つて、我々の最も大きな寄與が世界人類になされるであらう。我々にして日本精神を失墜し、日本國民性を小さくしてしまつたならば、我々の世界に生きる意義は失はれ、我々の世界人類に對する使命は滅びるで

涵養する

あらう。この意味に於て、我々は人間として生きるといふことを考へる前に、日本國民として、最も正しく且大きく生きるといふことを考へねばならない。日本國民として最も正しく、大きく生きるといふことは、日本精神を展開させ、これを世界に擴充して行くことに他ならない。

苟くも日本人として、我が祖先の肉體と靈魂とを傳へてゐるものに、幾分なりとも日本精神を持つてゐないものはない筈である。けれども、それを確實に把持し、且、それを涵養してます〳〵立派なものにして行くには、どうしても教育の力を借らねばならない。こゝに、國民教育の必要があり、國語教育の必要があり、國文學教育の必要があるのである。

所が、こゝに考ふべきことがある。世界は時を逐うて變化

世界精神
現代精神

しつゝある。時代は暫くも靜止しない。隨つて、世界は現狀のまゝに長く止るものでない。國民精神は歷史の悠久を通じて一貫して傳ふべきものではあるが、併し、それは歷史を超越して不變であるべきものではない。時代の變化に應じて、その不備不足なものは常に補はれ、その不適當なものは適當なものに改められて行かねばならないものである。即ち、その本幹は動かすべきではないが、その枝葉は常に補はれ、改められ、又、その精神の現れは、常に時代に應じて變化し行くのでなければならない。これを解り易くいへば、他の長を採つて、我の短を補うて行くべきものである。こゝに於てか、國民教育は國民精神の理解・涵養と共に、世界精神・現代精神の理解を必要とする。

波及する

適應する

廣く世界を見渡して見れば、我々は現代に世界を通じて流れてゐる或精神を見出すことは容易である。西洋にある現象が決して西洋に限られないで、我が東洋にも波及して、日本に支那に同じ樣な現象の起ることは、一つや二つに止ることではない。交通・通信機關の發達に由つて、昨日の西洋のことが直に今日東洋に來るといふほどである。これはその底に世界に共通して流るゝ現代精神の在ることを語る事實である。我が日本國は東洋に位置してゐると雖も、日本國民は常にこの世界精神を理解して世界に適應して變化しつゝ生きて行くことを心掛けねばならない。これを怠るならば、日本精神は固陋に陷り、日本國家は世界に孤立するに至り、それが爲に國家を滅亡に導くこととともなるべきである。國家を世界に孤立の地位に立たせるといふことは、單に國交の上でい

はるべきでなく、精神的にもいはるべきことである。さうして、これほど國家の存立・發展に恐るべきことはないのである。

それであるから、我々は傳統の日本精神を縱の絲と見、世界に共通する現代精神を横の絲と見ると、この二つの絲が唯我我の中に不調和に併存するといふのでは困る。若し、又この二つの絲が混亂して、互に相矛盾し、衝突するやうなことがあれば、彌困る。否、現にこの二つの精神の不調和・矛盾・衝突は社會の現象として現れてゐる。右と左と相分かれて互に相爭ひ、相搏つの狀態に在るのである。こゝに於てか、我々はこの縱横二つの絲を以て一つの織物を織出すことを志さねばならない。即ち、この二つの精神の調和・統一を目ざして進むことを最も大切な任務としなければならない。一面に於ては、日本精神を生かし、これを磨いて益〻立派な光を放たしめ、又、一

穩健中庸

極左

危殆

戒心する

國語と國文學

東京帝國大學國文學研究室内藤村作編、國語・國文雜誌第六十一號昭和四年三月五日號に關する專門學術講演の中等讀本に於ける現代文」に據つたもの。

方に於ては、世界精神にも共鳴を保つやうな穩健中庸であり、大きく東西を包容し得る精神を養成することを目標として進むことを努めねばならぬ。換言すれば、日本的であると共に、世界的であるところの精神を養成しなければならない。民族的であると共に、國際的であるところの精神を養はねばならない。極左の精神が國家を危殆に導くことは誰しもが戒心してゐる所であるが、又、それと同樣に極右の精神も亦國家に取つて危險であらねばならない。我々は飽くまでも、この二つの精神の調和・統一を目標として進まねばならない。

（國語と國文學第六十一號）

女子新國語讀本　新制版　卷十　終

時代	天皇	元號	著作家	作品	關係記事
奈良以前	原藤				
	飛鳥				
	1 神武				
	綏靖				
	安寧				
	懿德				
	5 孝昭				
	孝安				
	孝靈				
	孝元				
	開化				
	崇神				
	10 垂仁				
	景行				
	成務				
	仲哀				
	神功皇后				
	應神				
	15 仁德				
	履中				
	反正				
	允恭				
	安康				
	雄略				
	清寧				
	顯宗				
	仁賢				
	武烈				
	繼體				
	安閑				
	宣化				
	20 欽明				
	敏達				
	崇用明				
	30 推古				
	舒明				
	35 孝皇極	大化・白雉			
	齊明				
	天智				
	弘文				
	天武	朱鳥			
	40 持統				
	文武	大寶・慶雲			
	元明	和銅			
	元正	靈龜・養老			
	45 聖武	神龜・天平			
	孝謙	天平感寶・天平勝寶			
	淳仁	天平寶字			
	稱德	天平神護・神護景雲			
紀元		500	1000	1100	1200	1300	1350	1400
著作家		日本武尊	聖德太子	人麻呂 安萬侶 憶良 赤人 舍人親王 老 虫麿 諸兄 眞備 家持
西紀	前600	1	100	200	300	400	500	600	700
作品	（神話）	（傳說）	（歌謠）	（祝詞）	（壽詞）	（宣命）	十七條憲法	古風 日出處天子 萬葉集 懷風藻
關係記事			神功皇后新羅御親征		佛教傳來	留學生渡隋 法隆寺建立	大化新政	律令撰定 奈良遷都 國分寺建立	王仁來朝	四道將軍	和氣清麻呂流さる

於ける現代文」に據つたもの。

女子新國語讀本 新制版 卷十 終

江戸 | 安土桃山 | 室町時代 | 吉野朝 | 鎌倉時代 | 平安時代（院政時代） | 奈良

110 100 95 90 85 80 75 70 65 60 55 50 45

後西 明暦・萬治・寛文 明正 寛永 後光明 正保・慶安・承應 後陽成 文祿・慶長 後水尾 元和 後奈良 享祿・天文・弘治 正親町 永祿・元龜・天正 後柏原 文龜・永正・大永 後土御門 文正・應仁・文明・長享・延德・明應 後花園 寶德・享徳・嘉吉・文安・長祿・嘉正・康正・ 稱光 正長 後村上 興國・正平 後龜山 建德・文中・天授・弘和 後小松 元中・應永 後花園 嘉元・元德・元弘・ 後醍醐 嘉元・正中・ 後花園 應長・正和・文保・ 後二條 乾元・嘉元・德治・延慶 後伏見 正安・正應・永仁 後宇多 建治・弘安・文永 後嵯峨 正嘉・正元・文應 後深草 寶治・建長・康元・ 後嵯峨 寶元・建治・ 四條 暦仁・延應・仁治 後堀河 安貞・寛喜・貞永・嘉祿・ 後仲恭 順德・建暦・建保・承久 後鳥羽 土御門 建久・承元 後鳥羽 建久・建仁・元久・ 後高倉 養和・壽永・元暦 後安德 承安・安元・治承 高倉 嘉應・仁安 六條 二條 後白河 保元・平治・永暦・應保・長寛・永萬 崇德 天治・大治・天承・長承・保延・永治・康治・天養・久安・仁平・久壽 近衛 後白河 鳥羽 天仁・天永・永久・元永・保安 後一條 寛仁・治安・萬壽・長元 後朱雀 長暦・長久・寛德 後冷泉 永承・天喜・康平・治暦 後三條 延久 白河 承保・承暦・永保・應德 堀河 寛治・嘉保・永長・承德・康和・長治・嘉承 後一條 長和 三條 寛弘・永延・永祚・正暦・長德・長保・ 一條 花山 寛和・天禄・天延・貞元・天元・永觀 圓融 天暦・天德・應和・康保 冷泉 安和・天禄 村上 天暦・天德 朱雀 承平・天慶 醍醐 昌泰・延喜・延長 宇多 寛平 光孝 仁和・寛平 陽成 元慶 清和 貞觀 文德 仁壽・齊衡・天安 仁明 承和・嘉祥・仁壽 淳和 天長 嵯峨 弘仁・和 平城 大同 桓武 天應・延暦 稱德 天平神護・神護景雲 光仁 寶龜 淳仁 天平寶字 孝謙 天平感寶・天平勝寶 聖武 神龜・天平 元正 靈龜・養老 元明 和銅 文武 大寶・慶雲

家康 家光 家忠 家秀 綱秀 吉秀 吉信 吉長 昭榮 輝晴 義稙 義澄 義稙 義尚 義政 義勝 義教 義量 義持 義滿 成良親王 護良親王 守邦親王 守時高時 親王 師時 久明 貞時 惟康 時宗 親王 宗尊 時頼 親嗣 經時 頼經 泰時 實朝 義時 頼家 時政 頼朝 廣元 將軍 執權

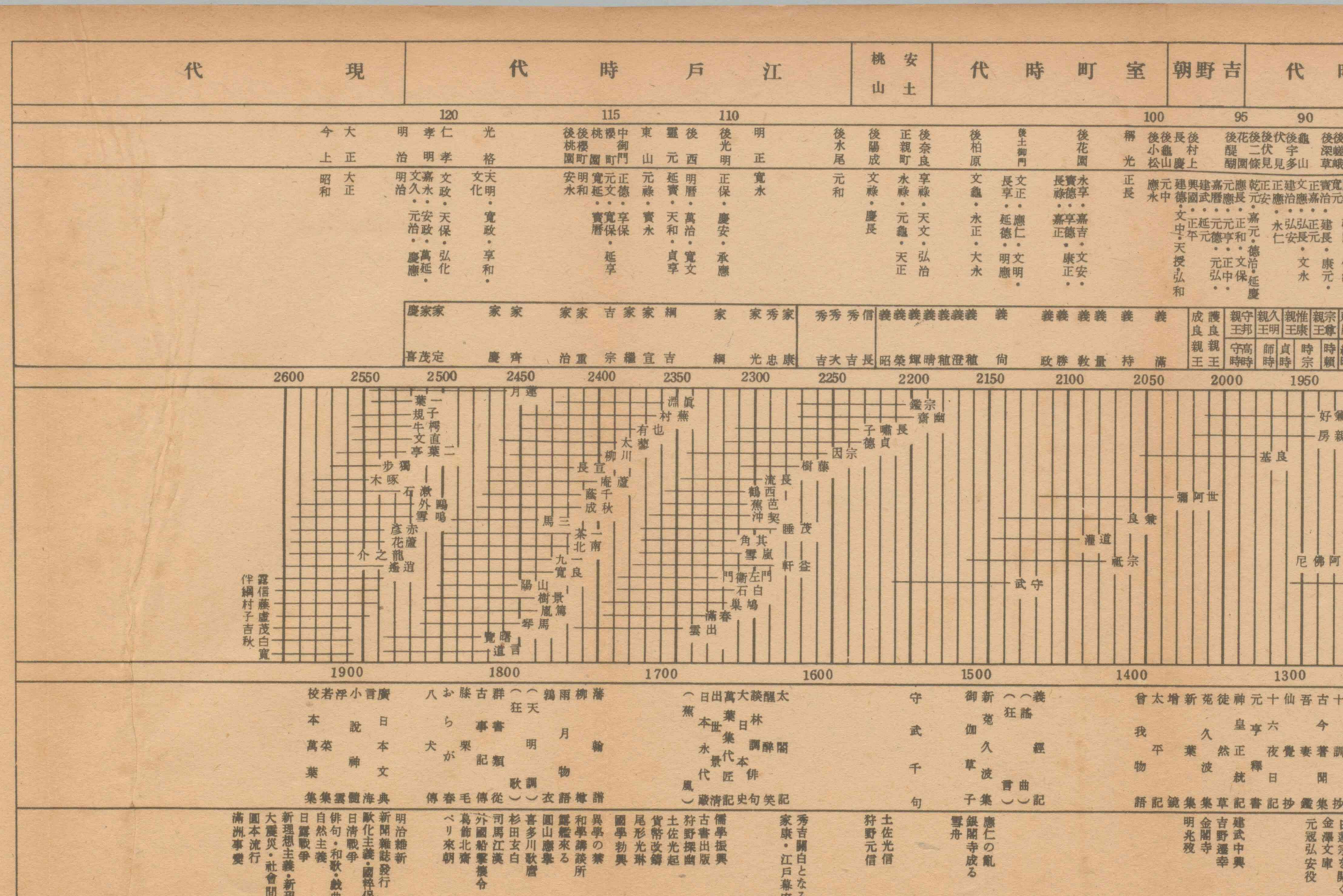
0 2300 2250 2200 2150 2100 2050 2000 1950 1900 1850 1800 1750 1700 1650 1600 1550 1500 1450 1400

眞藻 鶴蕉 本 雲 長 流 西 芭 契 沖 角 雪 門 左 白 鳥 衛 石 巢 滿 出 春 樹藤 因宗 子德 嘯貞 長 齋 幽 鑑宗 睡 茂 軒 益 其 嵐 良 彌 阿 世 基 良 好 房 親 儻 賴 俊 基 西 俊 忠 行 成 長 度 王親内子式 隆 家 定 朝 實 蓮 日 尼 佛 阿 灌 道 祇 宗 武 守 岑 忠 順 衡 匡 則 是 之 貫 澄 最 海 空 有 智 内子親王 香 良 年 業 平 行 眞 道 庵 友 恒 躬 昭 遍 麻 人 安 侶 萬 侶 人 赤 齊 虫 持 家 老 兄 備 忠 好 言 納 少 清 部 式 紫 部 式 泉 和 門 衛 染 赤 輔 大 勢 伊 位 三 貳 大 任 公 國 隆 信 經

1600 1500 1400 1300 1200 1100 1000 900 800 700

太醒 閣 記 大談 林 日 調 醉 本 俳 萬 句 葉 笑 集 代 匠 記 日出 世 景 代 永 厳 （蕉風） 義 （論 （狂 言） 經 曲 記 曾 我 物 語 太 平 記 増 鏡 新 葉 集 苑 久 波 集 草 然 抄 徒 草 記 神 皇 正 統 記 元 亨 釋 書 十 六 夜 日 記 仙 覺 抄 吾 今 著 聞 集 古 今 奏 聞 集 十 訓 抄 字 治 拾 遺 物 語 新 勅 撰 集 東 關 記 行 道 日 記 源 平 盛 衰 記 保元物語・平治物語・時政執權 金 槐 集 大 住 吉 物 語・方丈記 水 鏡・今 鏡 新 古 今 集 千 五 百 番 歌 合 長 秋 詠 藻 山 家 集 古 來 風 体 抄 千 載 集 詞 花 集 金 葉 集 榮 花 物 語 今 昔 物 語 狹 衣 物 語 和 泉 式 部 日 記 新 源 氏 物 語 紫 式 部 日 記 更 科 日 記 漢 朗 詠 集 記 錄 所 設 置 大 和 物 語 落 窪 物 語 枕 草 子 宇 津 保 物 語 和 名 類 聚 抄 蜻 蛉 日 記 後 撰 集 土 佐 日 記 今 日 集 伊 勢 物 語 竹 取 物 語 古 今 集 日 本 後 紀 續 日 本 後 紀 文 德 實 錄 日 本 紀 古 語 拾 遺 萬 葉 集 出 雲 風 土 記 日 本 書 紀 風 土 記 古 事 懷 風 藻

明暦・萬治・寛文 儒學振興 古書出版 狩野探幽 秀吉關白となる 家康・江戸幕府を開く 土佐光信 狩野元信 應仁の亂 銀閣寺成る 雪舟 建武中興 吉野遷幸 金閣寺 草 正 釋 書 建 武 中 興 正 統 記 平氏亡ぶ 源空淨土宗を傳ふ 榮西臨濟宗を傳ふ 時政執權 賴朝幕府を開く 親鸞眞宗を開く 道元曹洞宗を傳ふ 日蓮宗を開く 金澤文庫 元寇弘安役 鑑定・藤原信實 保元の亂 平治の亂 源空淨土宗を傳ふ 北面武士置かる 前九年役 鳳凰堂建つ 記錄所設置 後三年役 遣唐使を廢す 和歌所創設 小野道風 道長關白となる 高野山開かる 平安遷都 奈良遷都 國分寺建立 和氣清麻呂流さる


現代
江戸時代
安土桃山
室町時代
吉野朝
120
115
110
100
95
90
今上 昭和
大正 大正
明治 明治・文久・元治・慶應
孝明 嘉永・安政・萬延
仁孝 文政・天保・弘化
光格 天明・寛政・享和・文化
後櫻町 後桃園 明和・安永
中御門 櫻町 元文・寛保・寛延・寛暦
正德・享保
東山 元祿・寶永
靈元 延寶・天和・貞享
後西 明暦・萬治・寛文
後光明 正保・慶安・承應
明正 寛永
後水尾 元和
後陽成 文祿・慶長
正親町 永祿・元龜・天正
後奈良 享祿・天文・弘治
後柏原 文龜・永正・大永
後土御門 文正・應仁・文明・長享・延德・明應
後花園 永享・嘉吉・文安・寶德・長祿・嘉享・康正・嘉德・正
稱光 正長
後小松 後龜山 長慶 後村上 興國・建德・文中・天授・弘和・建武・延元・正平
後龜山 元中・應永
後伏見 後二條 後花園 正安・乾元・嘉元・德治・延慶・應長・正和・文保・嘉暦・元德・元弘・正中・元亨
後伏見 正應・永仁
後宇多 文應・弘安・建治・文永
後龜山 正嘉・正元・建長・康元・寶治・元
後深草 後嵯峨
家康 家忠 家光 家綱 家宣 吉宗 家繼 家重 家治 家齊 家慶 家定 家茂 慶喜
秀忠 秀吉 信長
義昭 義榮 義輝 義晴 義稙 義澄 義稙 義尚 義政 義勝 義敎 義量 義持 滿
護良親王 成良親王
守邦親王 守高時
久明親王 師時
惟康親王 貞時
宗尊親王 時宗
亀山 時頼
2600 2550 2500 2450 2400 2350 2300 2250 2200 2150 2100 2050 2000 1950
露伴 信綱 藤村 虛子 茂吉 白秋 寛
一葉 子規 牛文 亭 二葉 直樹 獨歩 木啄 石 漱外 雪 鴎鳴 赤彦 蘆花 龍之介 遙逍
月 蓮 山陽 樹 嵐 琴 馬 言 曙覽 道
村 洲 眞 蕪 有也 太 川 柳宣 蘆 庵 千秋 長 藍 成 三 馬 茶 北一 九 寛 一南 良 景 篤
長 子 嘯 貞 德 因宗 樹 藤 流 鶴 蕉 沖 西 芭 契 睡 茂 角 雪 其 嵐 門 左 白 鳩 衛 石 巢 釜 軒 春 滿 出 雲
鑑 宗 齋 幽 彌 阿 世 良 秉 灌 道 祇 宗 武 守
好 房 基 良 尼 佛 阿
1900 1800 1700 1600 1500 1400 1300
廣 日本文典 新聞雜誌發行
言 海 歌化主義・國粹保存主義
小 說 神 日清戰爭
浮 髓 雲 俳句・和歌・戲曲の改革
若 自然主義
校 日露戰爭
本 新理想主義・新現實主義
萬 大震災・社會問題
葉 圓本流行
集 滿洲事變
八 犬 傳
おら が 栗 毛 春 ペリ來朝
群 書 類 從 古 事 記 傳 外國船擊攘令 蔦飾北齋
落 輪 譜 異學の禁 和學講談所 雨 月 物 語 露盤來る 鶯 衣 圓山應擧 喜多川歌麿 杉田玄白 司馬江漢
柳 樽 (天 明 調) (狂 歌)
林 日 本 匠 俳 句 史 記 儒學振興 古書出版 狩野探幽 土佐光信 狩野元信
大 醒 醉 調 笑 記 萬 葉 集 代 匠 記 清 藏 日 世 本 永 景 代 風 (蕉)
太 閤 記 秀吉關白となる 家康・江戸幕府を開く
守 武 千 句
義 (諧 經 (狂 曲 言) 記) 新 菟 久 波 集 御 伽 草 子 銀閣寺成る 雪舟 應仁の亂
曾 我 物 語 太 平 記 増 鏡 新 菟 久 波 集 葉 集 明光殁 金閣寺 吉野遷幸 皇 正 統 記 建武中興 神 然 草 書 徒 釋 日 記 元 亨 抄 十 六 夜 覺 仙 吾 妻 鏡 今 著 聞 集 金澤文庫 元寇弘安役 十訓抄

昭和十二年八月五日印刷
昭和十二年八月十五日發行
昭和十三年一月二十二日訂正再版印刷
昭和十三年一月二十七日訂正再版發行
昭和十六年七月十三日訂正三版印刷
昭和十六年七月十二日發行

女子新國語讀本（新制版）
定價 各金六拾錢

編者 澤瀉久孝
木枝增一

發行者 東京市麹町區飯田町二丁目二十番地
中等學校教科書株式會社
代表者 山本慶治

印刷者 大阪市西區阿波座中通二丁目二十三番地
合名會社 交進社印刷所
代表社員 余部留吉

發行所 東京市麹町區飯田町二丁目二十番地
中等學校教科書株式會社
日本出版文化協會會員番號 一一七五二二

（略名）修文澤瀉女國

配給元 日本出版配給株式會社
東京市神田區淡路町2ノ9

三西

藤東衫子